

晃  
山  
勝  
概

卷之二

ル 4  
3587  
2



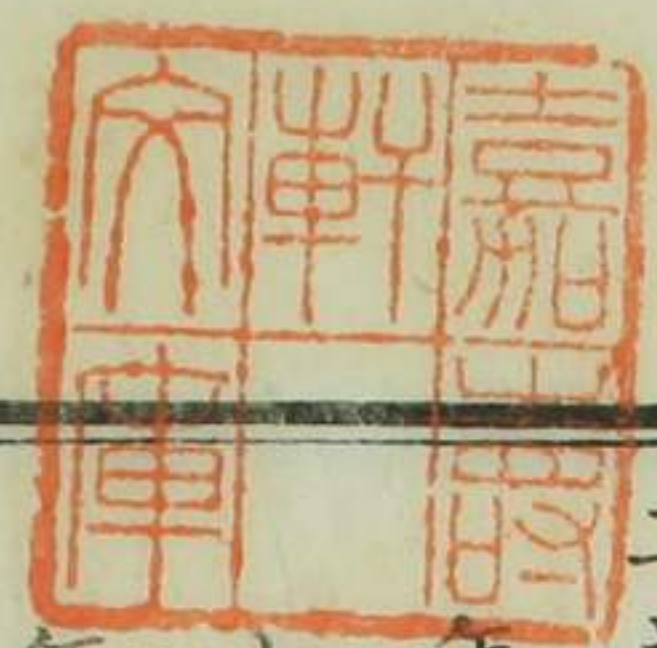


門凡  
3587  
2

晃山勝概卷之二

内區之二

二荒山神社已祭神大社傳を按るに今と距る事二千  
 年餘の昔崇神天皇の御宇皇子豊城入彦命親ら崇祀  
 し奉る云云是祀の緣由也其後平城天皇の大同三  
 年沙門勝道威靈の感格に憑り荒尾山の清地とトシ  
 始て社殿を建立を祭祀を屢の神に乃ち大己貴命  
 田心姫命味耜高彥根命是也其年朝廷祈願の事あり  
 應報のため橘利遠に勅して社殿を改造せしめらる  
 然るに累年洪水迸逆の時下方り社地の東岸崩壊し



晃山勝概 卷之二

昭和十一年  
 六月三日  
 小田新吉氏  
 長田重太郎氏  
 代官贈



て危況ききつみ逼せまる之これより於おて仁明天皇にんめんてんの嘉祥三年かしょうさん社殿しゃでんと恒例山こうれいさんより移うつる是こゝより旧趾きゅうし大味おほし高彦根命たかひこねのみことを本宮ほんみやと称なづし遷座せんざの社殿しゃでん大己おほの命のみことを新宮しんみやと唱なふ是こゝより先さき

續日本後記云承和三年十二月授下野國しもつね後五位上ごごいじょう勳四等二荒神社正五位下しうごにあらはれ

同八年四月奉授下野國正五位下しもつね勳四等二荒神社正五位上しうごにあらはれ

同十五年八月廿八日授從四位下しうごにあらはれ

文德實錄云天安元年十一月在下野國勳四等二荒神充封戸一畑

三代實錄云貞觀元年正月廿七日授下野國從三位勳

四等二荒神社正三位しうごにあらはれ從四位下じうごにあらはれ以上從三位迄いじょうにあらはれ

同七年十二月廿一日授從二位云云

同十一年二月廿八日授正二位云云

以上七回いじょうしちかいの勅宣ちくせんあり方かた今正一位勳一等いませいいちじうごにあらはれと稱なづと進すすめめららせせししやや古記こきの爾來にんらい數多かずおほの變革へんかくと經へて建保三年けんぽうさん但た馬法印ばほふいん辨覺べんかく鎌倉將軍かまくらしやうぐんの請こゝろひ當今とうこんの地ちとトとして新小あらた神殿かみでんと造營ぞうえいせり此時このときに當りて天下あまのの形勢かたせ穩とくならら以も爾後にんご四百餘年よひやくじゆねんの間ま兵乱へいらん止時とどなく祠堂しどう殆たいていと頽廢たいはい小こ歸かへせんとせしと元和三年げんわさん東照宮遷座とうしやうみやせんざあり及およびて廢め



と興し同五年殿堂唐門等に至る迄悉く新營せらるる  
後三代將軍家光公更之を改造せらるる旧時比  
まハ壯觀を増と敷層明治六年勅して國幣中社と  
なし自今官祭仰出さる云云

新宮馬場

東照宮の表門外なる五重塔の前より真直

又二荒山神社に至る大道と云ふ長さ二町許此所ハ

東は東照宮の宮殿高く耀き馬場の西辺ハ老杉鬱々

として頗る幽邃なり一た此歩を進む生ハ実ハ仙境

遊ぶの思ひをなましむ

唐銅鳥居

新宮馬場の行詰りより其高さ二丈二尺

周圍六尺五寸扁額ハ二荒山神社の五字と掲く有柵

川左府宮の梁筆をり元來新宮ハ鳥居の無しと

元祿八年三佛堂後の杉と四本伐木して建設し其後

寛政年中唐銅を改めら思しと云ふ

社務所

唐銅鳥居の北辺ハ昔の別當所ハ安養院

と云ふ寺よし東照宮の社家一筋なる此の社務を

司としし明治革新以後社務所と新築し官司と置

て社務と總掌せしむ

拜殿

社務所より西ハ當る方位南ハ面ハ桁行七間半

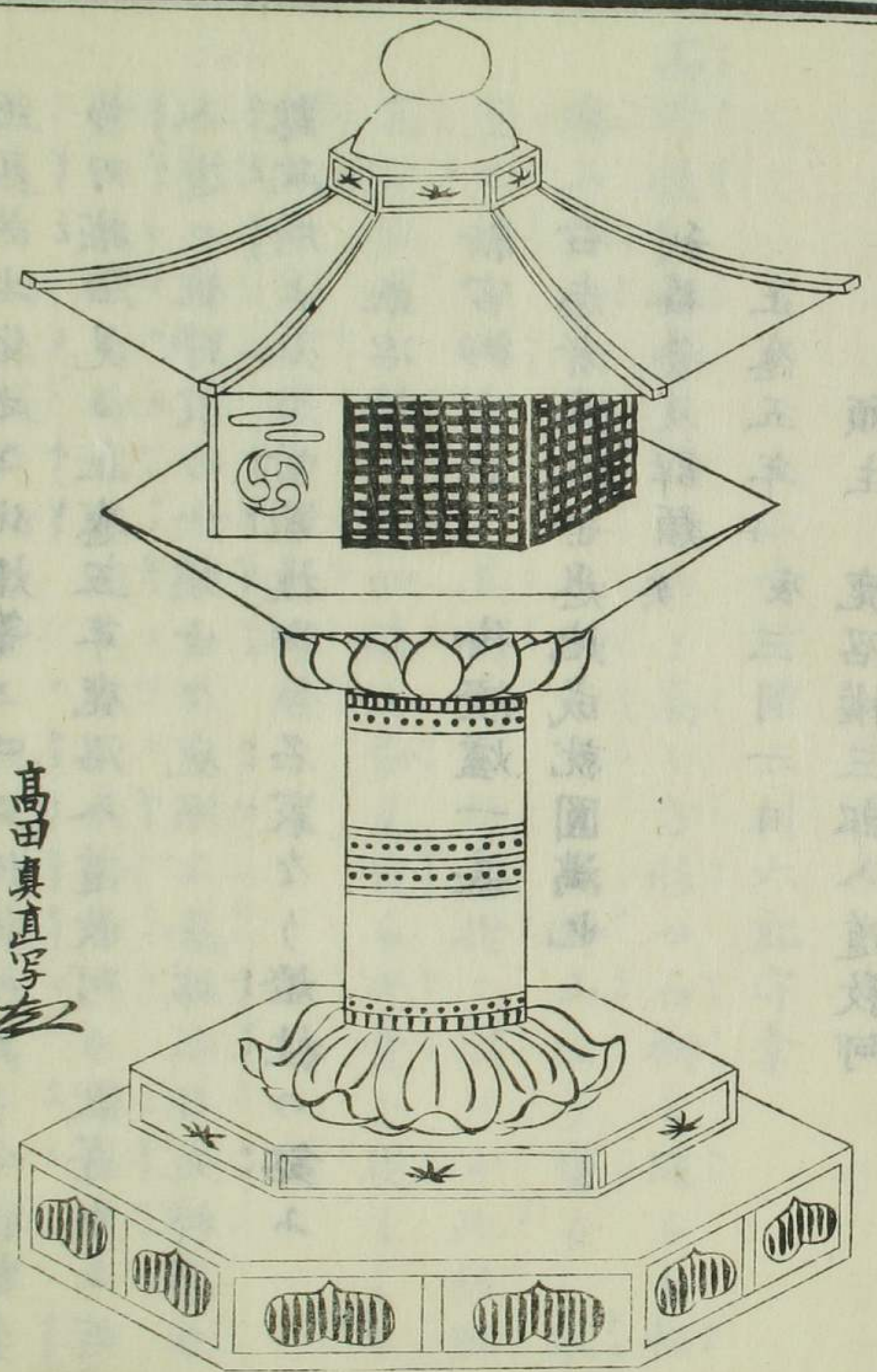
梁間六間餘四方椽大床舞臺造り惣上蔀をり



唐門 拜殿と本殿との中間あり間口一間半惣黒塗  
なり此門の左右より銅葺の瑞籬を廻らし前の十五  
間奥行十八間にして本殿を圍ふ

本殿 五間四方八棟造り柱に金欄卷外承塵の上ハ草  
花の極彩色唐戸に臘色に減金の金具を施し高欄濱  
椽共々朱塗よし後へ折廻に殿内の前の一間通を  
内拜の處となし其内の内陣なり内陣の左右は當社  
の寶器と陳列し正面より玉簾を垂る金幣を捧げて  
庶人小禮拜せしむ

唐銅燈爐 唐門外の西南角ふあり左圖の如し其高さ



高田真直写



七尺許土俗之と化燈籠と呼ふ何の所為り今猶數多  
の刀痕を見る正應五年鹿沼入道教阿の獸寄る所  
入道ハ佐野家の一族世々鹿沼ニ居城し日光神領の  
惣政所として當國拔群の名家なり燈柱の銘ハ

奉治鑄

新宮御宝前

御燈爐一基

右志者為二世悉地成就圓滿也

利益普及群類 矣

正應五年 壬辰 三月一日

願主 鹿沼權三郎入道教阿

并清原氏女 敬白

大正常陸國三村六郎守季

高野槇 拜殿の傍ニあり高く方形の石柵と廻らせ相

傳ふ弘法大師登山の砌苗木と高野山より齋らし来

至て植る所なりと其實否ハ暫く措て問ハば此槇幹

高ららんと雖も三四株ニ分ち自ら老骨と現るして

實ニ千年前後の古木と思はる

三本杉 拜殿の西南隅ニあり則ニ荒山神社の神木也

昔の社殿ハ神木の前ニ在て東向なりしが正保二年

改造の砌社殿の向と替て北の山際へ曳きとるよ



至斯く神木も正面より現れしなり

神寶

瀨鼻太刀 鞘皮卷 一腰

稱々切丸 鞘皮卷 一腰

杖珊瑚樹 一本

琵琶 銘玉簾 一面

水晶寶塔 一基

小山氏寄納兜 一領

柏太刀 三振

此他寶器數多ありし之と畧す

末社 本社の外より十餘の社堂ありしを今皆廢

して御友神社と稱をり一社存せり

例祭 昔の三月朔日二日の兩日なりしり今ハ四月十

七日より改む年より東西町々の人民逸物狂言附祭

等と出し替々戲藝と盡して頗る盛なる事なりと當

日神輿の本宮へ渡御あり古例の祭儀終むハ直ち

還御の事なりと云ふ

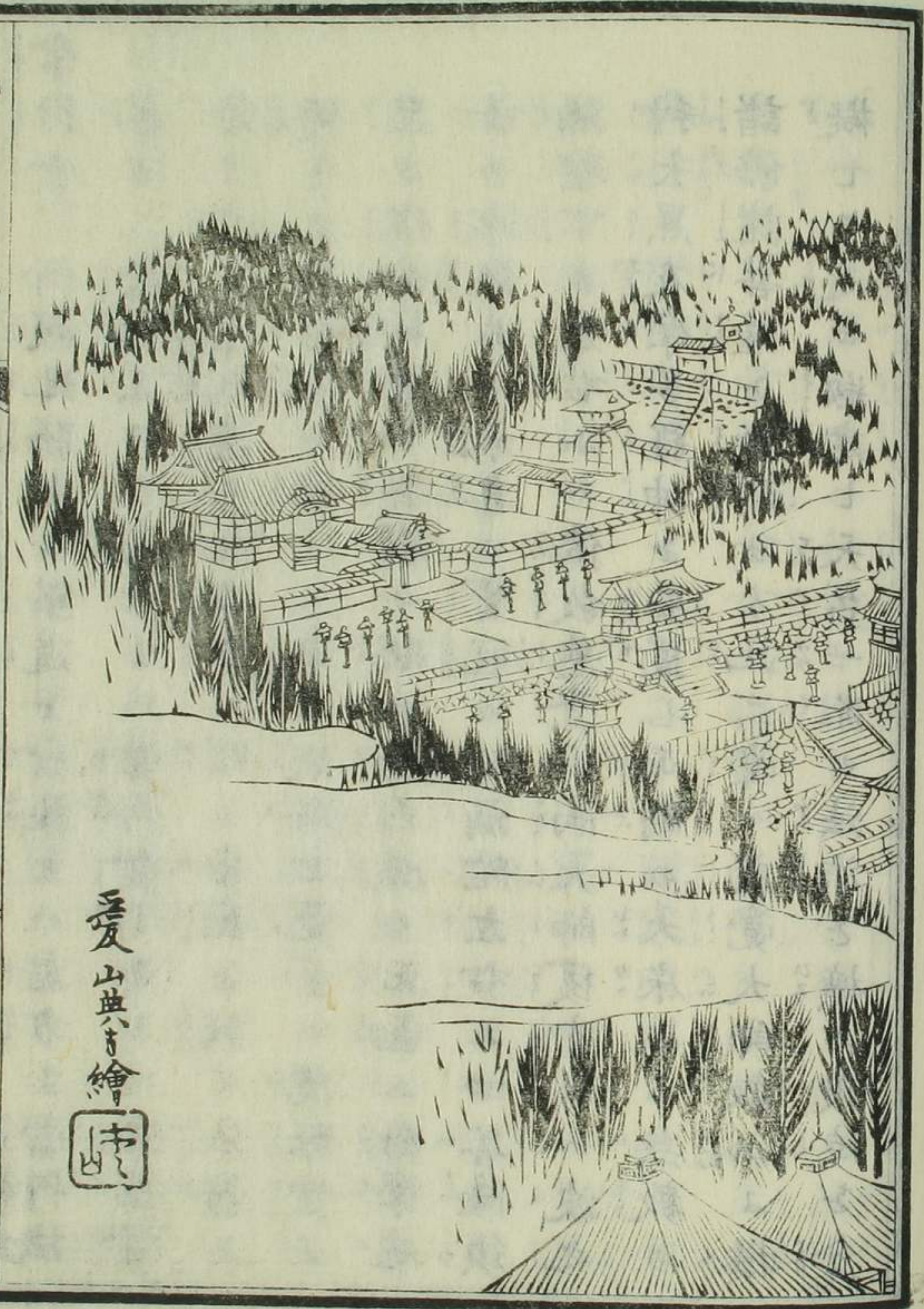
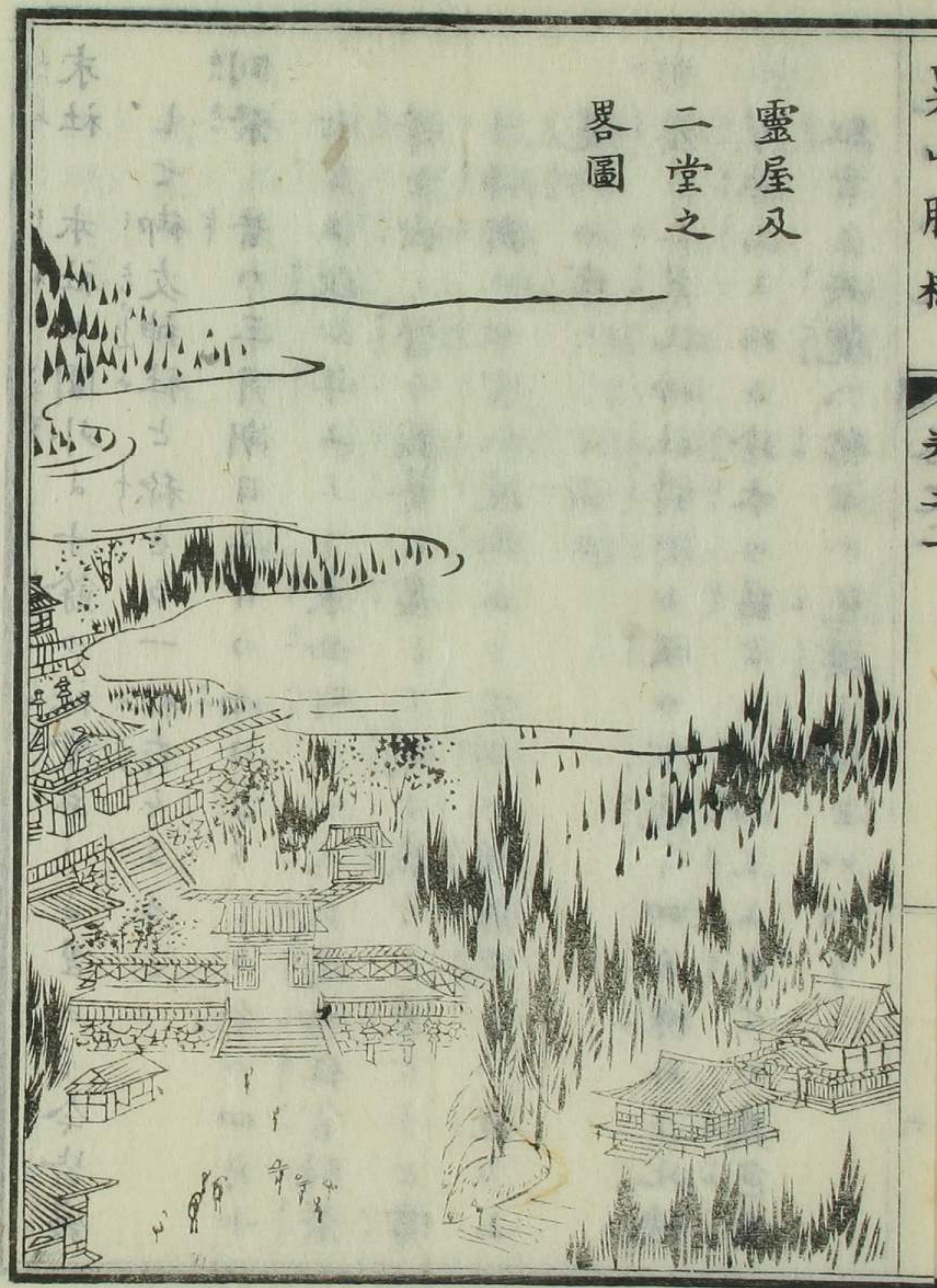
緋櫻 二荒山神社前をり坂の下通より四五株あり此種

男躰山より珍木の苗なり山上に在る其色真

紅を其共麓へ移せり色薄く咲といへり



靈屋及  
二堂之  
畧圖



愛山堂繪



吳山勝概

卷之二

七



常行堂 御殿地脇なる新道と出抜まは左方又常行法  
 華の二堂竝立せり大なるは常行堂小なるは法華堂  
 なり共々宝形造り此兩堂の間歩廊と設て法務小  
 便又此歩廊と潜りて南の坂路と登まは慈眼堂小  
 至る偕常行堂へ大間十間四面内椽の正面小維摩居  
 士の木像あり本尊の寶冠の阿彌陀左右小四菩薩須  
 彌壇下の左右ふは傳教慈覺の兩大師後堂小は波之  
 利大黒及摩多羅神を安置し兩側の大床小は無數の  
 諸佛諸菩薩と排列せり此二堂の慈覺大師叡山は模  
 擬して之と叔建し天台一派の法流と擴め衆徒を令

て一は法華三昧の行儀と修し一は常行三昧の法儀  
 と行へしむ當時鎌倉右大將家の崇信と得常行三昧  
 修行の燈油料として文治二年當國寒川郡又於て十  
 五町の地と寄附せらま尋て右府家より水晶の念珠  
 等と寄らまよりまま古くより頼朝堂と稱せし  
 ならん往古此堂叔建の地の佛岩の辺東照宮表門  
内三神庫邊に  
 てありしが元和年中東照宮の宮殿造營ふ際して此  
 所へ移さまよりと云ふ  
 法華堂 常行堂の西又並ふ大間六間四面なり起立年  
 代の事の前又同じ本尊の普賢菩薩左右小十羅刹及



鬼子母神前の大床ふへ正観音及軍又利明王と安置  
 後堂より傳教大師書寫の妙典一部と納むと云ふ  
 靈屋徳川三代將軍家光公廟公の慶長九年七月江戸城に生る元  
 和九年八月八朝して位正二位に進み官内大臣に遷  
 星征夷大將軍に任ぜらる寛永九年正月前將軍薨と  
 るふ及て盡く天下の諸侯と大城に招き之を論して  
 曰く我祖考卿等の方ふ因て天下と定む故に禮待と  
 加ふ事譜第の將士と同じのらに家光ふ至てハ襦袢  
 已ふ天下の主より自ら祖考と異なる者あり今より  
 卿等と待つ譜第と同じをべし若し心は厭くせんハ

三歳の暇と給せん各々國に還り熟思して去就を安  
 せよと諸侯皆逡巡して曰く敢て命を聴ざらんやと  
 是より權勢大に定り永く幕政の親謨を堅くをる者  
 ハ偏ふ公の聰明勇決に出了所也慶安四年四月六日  
 江戸城に於て薨に歳四十有八法諡と大猷院と号を  
 遺命に因て當山に葬り當時公の恩眷に感して殉死  
 する者五人以て士と撫育するの厚まを知りし  
 二王門 常行法華二堂の前より西の正面に當り東南  
 又面せり桁行四間半梁間二間半三棟造り左右に右  
 彌那羅延金剛左輔密迹金剛の二王を安置せりを以



て二王門と名附く則靈屋の表門なり裏の左右も  
同形の二王と安を是ハ東照宮の表門に在しと明治  
六年此所へ移せりと云ふ

御手洗屋 二王門を八て右方より中央の水盤に御

影石にて長さ八尺三寸幅四尺高さ三尺五寸覆屋ハ

二間半より二間四隅の柱に御影石にして一隅より三本

共より十二本の石柱を以て支ふ桁ハ木製にて金襴置

揚の彩色天井より大なる龍を画けり狩野安信の筆

なりと云ふ

寶庫 二王門内の左方よりあり間口七間奥行三間内より

種々の宝器を蔵せりと云ふ

諸家獻備燈燼 總數三百十一基内唐銅六百四十四基

唐銅燈燼ハ二天門の石階上より夜叉門内より竝立し

石燈燼ハ二天門下及二王門内外各所より排列せり

二天門 二王門より數歩ふして左方より峙つもの是也

東北より面せり桁行五間餘梁間二間餘二重扇垂木三

手先造り前後の破風下ハ双頭の額を彫り扁額ハ後

光明帝の宸翰大猷院の三字なり又上段ハ手先より

升組より至り造極彩色下段の升組ハ黒塗其間々ハ

獅子犀等の彫物あり前の左右より廣目持國の両天を



安置するを以て二天門と名附く後の左右ハ緑色の  
風神と朱色の雷神と有り是ハ元陽明門の金剛柵内  
みありしを移せるものと云へり

鐘樓 鼓樓 二天門を入りて右方の石階を登り更ニ

左折して登るハ左右ニ鐘鼓の二樓對峙し高さ各々

三丈許銅板を以て樓腹を包み金鍮を打てり

夜叉門 鐘鼓二樓の間より正面ニ眩耀するもの是也

桁行四間二尺梁間二間半唐破風造り兩面の左右ニ

捷陀羅毘陀羅烏摩勒阿跋摩の四夜叉と安置するを

以て夜叉門と名附く前後の破風下ハ牡丹ニ唐獅子

其下通ハ金色の弁と組揚げ臂木の間に紅白の牡丹

と彫刻を柱ハ十二本朱塗にして胡麻壳状に削り成

し桁ハ残らば地紋と彫り梁鼻ハ鰻頭及獅子頭を彫

出し天井ハ格天井の内ニ唐木にて圓環を作り中ニ

牡丹の折枝と刻み門扉及羽目ハ金地ニ牡丹唐草の

透彫其他都て牡丹唐草と彫り故ニ牡丹の門と也

唱ふ由而して垂木柱一二の箇所と除くの外ハ湍

門悉く金の押箔にて裝飾せり故ニ光輝四方に射

る左右の袖扉ハ前の羽目ハ堆朱の完龍牡丹上の欄

間ハ金雞下の蹴込ハ激浪の彫物なり此袖扉ニ續き



永く廊と設て左右の石垣と達と此門以内の両辺よ  
木殿の背後と廻り方形小敷丈の石垣と築まあけ  
上小老杉森々として殊々靈威の嚴々なると覺ふ古  
来晃山の靈場と記とる者前後幾篇なると知らん然  
是とゆ一ル靈屋の内部よ及ぶ者なまハ何ぞや蓋し  
故あらん

朝鮮國獻備燈爐

夜叉門内の獻備燈爐二十二基中  
此燈爐二基左右に對立し唐銅製高さ各々一丈餘り  
明晉元年の獻備に係る燈柱の銘よ云

日光山燈籠銘并序

曩歲獲聞 日光山中為 東照大權現廣設道場  
既已鑄送法鐘以彰誠孝今又聞 大猷院殿真宇  
竝建遂治成燈籠轉達靈山用助崇奉之具仍讚永  
慕之意而為之銘曰

誕樹功德竝參諸天道場既闢慧燈方懸  
範銅作籠俾護神光爰寘法筵吐燄熒煌  
孝思無方冥福是薦寶坊長明金輪永轉

乙未年正月日

朝鮮國司憲府大司憲蔡裕後撰

知中樞府事吳 竣書

日光山燈籠銘并序



唐門 夜叉門の正面をり間口一丈五寸前後の破風下  
 雌雄丹頂の鶴平桁上へ白龍の丸彫なり前の兩柱  
 丸の金卷後の二柱及桁梁共々金地と彫り  
 天井ハ折揚の格天井ハ菊の折枝と刻正門扉ハ金地  
 小唐草羽目ハ牡丹唐草の透彫金具ハ都て帛紗減金  
 又左右の袖の羽目ハ白地ハ秋の七草と彫刻長是  
 室内ハ間廊下と設け席と敷て直ちハ拜殿ハ至  
 瑞籬 唐門の左右より後へ折廻して拜殿本殿と圍  
 羽目ハ地紋と透し上の欄間ハ松竹梅椿及種々の草  
 花小群鶴と刻正俗小之と百間百色の鶴と云ふ下の

蹴込ハ菊唐草兩面の彫物なり  
 拜殿 東北ハ面せり桁行九間梁間三間半千鳥破風及  
 向拜あり千鳥破風の枇杷板ハ牡丹小唐獅子向拜の  
 破風下ハ牝牡の金獅子也其四柱ハ金卷の角柱とし  
 て四面の中央ハ長く白色の菊唐草と彫る虹梁上ハ  
 松ハ鷹手扱ハ菊の籠彫象鼻の獅子頭ハ堆朱の卷揚  
 糸りと云ふ簷頭又ハ減金の釣燈才四個と掲け垂水  
 及下の升組ハ臘色又七寶鏝の金具と施し其下通の  
 欄間ハ四面悉く松小鷹の彫物なり唐戸ハ三扉共々  
 金地ハ龍及獅子と彫り其左右より後へ折廻して上



部と設く又殿内の結構ハ疊敷六十三疊中央ハ滅金の天蓋を掲げ其下ハ金梨子地の高机及三具足を備ふ天井ハ折揚の格天井ハ岩緑青を以て丸龍を画き内承塵の上ハ桐ハ鳳凰の浮彫なり正面の左右なる金壁ハ獅子と画く右ハ探幽左ハ安信の筆をる處と云ふ兩傍ハ朝鮮國より獻むる玳瑁の釣燈を据へ其左ハ同國獻備の樂器を陳列せり相傳ふ此拜殿本殿の彫物ハ探幽の素圖として當時名工の彫刻ハ係ると故ハ其精妙なる筆紙の能く尽す處ハ所らハ加之殿の内外都て金彩と装ふより拜覽の人眩耀魂を奪ひる

間室 拜殿本殿間の一室を云ふ間口二間二尺奥行四間半許正面ハ香爐と据へ左右ハ燈籠を置き燈籠ハ次き燭臺一對燭臺ハ次き蓮華の花瓶一對之ハ次て銀櫻銀柳の花瓶を排置是徳川三家及加州家より獻むる所此格天井ハ鳳凰を画けり本殿 間室より續く方立間半許佛殿造り二重屋根左右の破風板ハ金の向龍枇杷板ハ牡丹其下ハ双頭の犀と刻せり殿の周圍ハ悉く彫物にして金彩を施せ室内扉ハ常ハ鎖して其前ハ金梨子地の高机と据へ

嘉山勝概 卷之三 古



上へ不滅金の天盖てんがいを掲かぐ内扉ないひの内うちハ壯嚴さうげん赫灼かくしやくとして  
 大猷公たいしゅうこうの靈牌れいはいと安置あんじをと聞きけり  
 上供所じょうぐじょ 本殿ほんでんの西南角せいなんかくハ接續せつぞくを五間ごかんハ三間さんかん許常人の  
 八はちと許ゆるさば  
 包裏門ほうりもん 本殿ほんでん右側みぎがはの瑞籬すいぎハ連接れんぎを間口まぐち九尺くじふ許ゆる是本殿  
 奥院おくのえんハ通行つうこうの門かどなり  
 皇嘉門かうかもん 包裏門ほうりもんと咫尺しちせきを則すなはち奥院おくのえんの八口門はぐちもん也なり是ハ朝廷  
 より賜たまハる門かどの名ななりと云いふ横腹よこはらハ白堊らくわいと以もつて築  
 造ぞうし内外うちそとの桁せきハ堆朱たいしゆハ地紋ちもんを彫おり天井てんけいハ天人てんじんと  
 画えけり此門このかどの構造こうぞうハ他の門かどと異ことなり俗ぞくハ之これを龍宮りゅうきゆう

造ぞうりと唱なふ門内かどうちハ二條にじょうの石階いしきあり左ひだりハ寶庫ほうこハ至いたり  
 右みぎハ奥院おくのえんハ詣まりべし  
 奥院おくのえん 皇嘉門かうかもん内の石階いしきを登のぼり右折みぎまがして更さらハ登のぼりハ奥  
 院拜殿えんはいでんの前まへハ至いたり八口はぐちハ石柵いしせきを設まけ左右ひだりみぎハ唐銅たうどうの  
 手桶ておけハ銅造どうぞうの蓮華れんげと挿さし拜殿はいでんハ東南とうぜんハ面おもてハ桁行せきぎ五  
 間梁間えんりやうかん三間殿内さんかんでんうちの中央ちゆうちゆうハ天盖てんがいを掲かけて下したハ高座かうざを  
 括くわへ左右ひだりみぎハ厨子くしハ佛像ぶつざうと安置あんじを又また殿後でんご咫尺しちせきの所  
 小石垣せういけんと築きき正面せうめんハ唐銅鑄たうどうちゆう技ぎの堅門けんもんと設まけ其その西袖せいそで  
 より圓筒えんとうの石柵いしせきと廻めぐらし中央ちゆうちゆうハ黄銅製かうどうせいの寶塔ほうたふと安  
 高たかハ一丈許いちじやうきよ基石きせきハ八角はつかく五級ごきゆうなり都みやこハ奥院おくのえんの構造こうぞう

皇山勝概 卷之三 五



ハ東照宮の奥宮と異なる所をしと雖も境界稍狭く  
して鑄抜門外に銅造の獅子と見れば是祖先より一步と  
譲り所

供所 別所の 龍光院と号し二天門の西にあり是靈屋の  
為に叙立せる所なり此中庭より靈屋に至るの石階  
と御供坂と称せり

阿部空煙墓碑 二王門内御手洗屋の北方石柵の外と  
外圍との間にあり阿部豊後守忠秋の墓なり石碑は  
小なる自然石にして空煙の二字と鑄を上に覆ゆる  
て八角に作り高さ三尺許前窓と彫透して空煙の

二字のを見ゆるやうに作為せり氏は幼より恪勤懈  
らば徳川第三世及四世の両將軍の事へて改と輔  
ことと三十餘年廉介と以て身と持し請訖と杜絶を其  
言行一に忠恕を本づく古大臣の風ありと故に恩賜  
年加わりて俸十萬石に至り宿老職に補せらる寛  
文十年致仕し延寶三年五月逝は法諡と透玄院天國  
空煙大居士と号を蓋し此靈屋近傍の地に葬らる宿  
願に outcomes 云ふ

梶氏墳墓 靈屋の奥院近き御堂山にあり左兵衛督源  
定良の墓なり石碑は丸形にして上は梵點一字下は

尾山 卷之三 法



從四位下握左兵衛佐源朝臣定良照光院月嶺圓心大居士と真中小鑄し右小元祿十一戌寅年左の五月中十四日と刺せり四辺小石柵と廻らし傍の大學頭林衛撰文の碑あり其畧は云く君幼小して慧敏武備を尊て聲色を喜ばに若冠より大猷大君より事へて頗る恩眷を蒙る大君薨るる及て遺命して當山小葬らし小君靈柩は扈從し遂小留りて家と是より四十七年毎旦雞鳴初て起嗽浴戒潔し物色と辨るる及て朝の詣り獨殿前小座し俯仰齋懔儼として存る事ふる如し冬春の交り方り凍風寒雪の中小立躰僵直

口噤たり小至るも敢て已はと元祿十一年五月病て卒を享壽八十有七大猷大君塋域の後小葬る蓋し其志と成るり水戸義公文と為り之と祭りて云く曾聞孝子廬親墓者未覩忠臣廬君墓者乃今於居士乎見之云云居士晩年突然左右小語て云く江戸小於て阿部空煙小歿せしをらん我彼小死後並とりと左右の者其所以を知らば果して三日を経て空煙の柩を送り來せりと亦奇と云べし

慈眼堂僧天海大正傳曰く師ハ奥州會津郡高田郷小生小姓ハ三浦氏天海と号し初め父一子なまを憂て月

慈眼堂  
傳曰く師ハ奥州會津郡高田郷小生  
小姓ハ三浦氏天海と号し初め父一子なまを憂て月



天子み祈る其妻瑞夢に感して妊ふことあり九月ノして誕生を幼より経世と樂まに誓て薙染と求む歳甫て十一本邑の辨譽師に依り頭密の二教と習學し後皇舜僧正に謁して終に大器となす天文年中園城興福の二道公に隨て聰明論及唯識因明を傳ふ慶長四年喜多院に住し尋て宗光寺に遷る東照神君深く其徳を欽慕せらま命して天台の南光坊と主宰せしむ慶長工皇勅して大僧正に任し山科の毘沙門堂に住せしめ親く翰墨を御して寺額を賜ふ衆皆之を榮と名同十八年台命に因て當山に瑞世し鐘鼓一聲山

川色に改む人皆中興の祖と仰く寛永二年二代將軍秀忠公東叡山に闢て大伽藍を建立し師を請して開山と為す同七年秋病に感むることあり自ら起ざるに知り禱を免むに湯藥を嘗に一日水を索めて嗽ま威儀を具へて佛を拜し且徒弟を誡て曰く汝等世の浮沈を事とせり勿き一に宗教を提唱せし足なると言畢て後容として寂を實し十月二日なり春秋一百又六語に曰く仁者ハ壽と其師の謂乎慶安元年謚を慈眼大師と賜ふ  
文珠堂 常行法華二堂の間より坂路を登り事二町許

尾山 卷之二 大



又して赤庫の前ま至まる夫それより右みぎ又また向むかへハ八口門也  
堂ハ門外かどの左ひだりあり四間よ三間さん許ゆるぎ總すべ上うへ部ぶ則すなは大師だいしの  
本地堂ほんちだうなり

供所くうじよ 文珠堂ぶんしゆだうの南みなみ小接せつ七間しち二間に素木造すきぞうり

求聞持堂くもんぢだう 供所くうじよの南みなみありこ塵ちん空くう藏ざうと安置あんぢを

唐銅燈爐たうどうだう 一基ひと門外かどの左ひだりあり無名むなをまハ其傳そのでんと得え

阿彌陀堂あみだだう 門内かどの左ひだりあり三尊さんそんの石像いしざうと安置あんぢ七後しちご小

白字はくじ又またてあ晃海和尚かうかいわうの銘文めいぶんと刻うせり

功德水くつとくすい 拜殿はいでんへ登のぼり一段下いちだんげの左方ひだりあり御手洗井也ごてらゐい

常つね小井こい拵しゆと鎖さして汲ひことと禁かん

鐘堂かねだう 門かどと入いて右みぎあり鐘徑かねのぢやう二尺五寸慶安元年けいあんげん大師だいし

の上のうへ足あし公海僧正こうかいそうぢやう師徳しとく報謝ほうしゃの為ため自らみづか鐘銘かねめい并なら又また文ぶんと

記きして寄進きしんせり所ところなり

經藏きやうざう 鐘堂かねだうと相並あひなぶ三間さん二間に内うち一ひと切き經きやう及およ内外うちそとの

典籍てんてきと納置なうぢと云いふ

地主神社ぢゆしんじや 拜殿はいでんの東北とうがくあり稻荷社いなぎやなりと云いふ

石燈爐いしどうろ 十三基じふさん門内かどの左右ひだりみぎ並列なみりせり徳川三家とくがわさんか及および

諸家しよけより寄進きしんせり所ところなり

拜殿はいでん 方位ほういへ正南せいなんより少ましく東ひがし小向こむか八棟造はちたうぞうりなり

光  
九



桁行五間半梁間三間半向拜ふ金色の鐸口を掲ぐ前  
 後の扉及上蔀ハ黒塗外長押の上通ハ金襴卷組物ハ  
 總彩色所々丸の内又二引の金紋を附是ハ大師の  
 定紋なる由三浦黨より出らせられハ左も右もべし  
 毎歳陰曆十月朔日建夜論義を行ひ翌二日の正當  
 日ふハ一山總出仕よて法華八講と修行を云ふ  
 寶塔 拜殿ふ咫尺石籬外の正前ふ石よて作ら高き  
 四尺長き三尺許の前卓と拵へ上ふ石の香爐獅子と  
 安し左右ふ三尺許の花瓶を置き相並びて高さ六尺  
 許の燈籠あり是又石造なり寶塔ハ高さ九尺許御影

石よて彫工を両脇と後ハ六部天梵天帝釈持國廣目  
 增長多門の石像よて護衛せり周圍ハ石垣の上ハ石  
 の玉垣を廻らし入口を設け是人の登らと禁じ  
 る為小經營せしものなりと云ふ  
 座主宮廟 門内阿彌陀堂の脇より左の石階を登りハ  
 禮拜所を設く三方ふ石垣を築揚上ふ石籬を折廻し  
 其内又寶塔十二基を安せり蓋し尊骸ハ皆東叡山よ  
 歛ふと云ふ  
 安養坂 常行堂の脇より西谷の方へ通行する沢道を  
 云ふ此東北の谷より流る來る谿水を古より安養沢

是山 卷之二  
 二十



と称せる由依て坂の名も安養坂と唱ふしと云ふ  
 善女神谷 安養坂の下通と西山谷と云へ夫より西町  
 の入口迄と善女神谷と云ふ此地も青龍の社あると  
 以て斯く呼なせりと旧幕府の頃ハ此辺ハ奉行屋敷  
 組頭屋敷火之番屋敷及坊舎等もあつて盛なる土地  
 なりしう明治維新の變革又遭遇し加ふる同七年の  
 火災ふ罹りて現今の姿といなりしとぞ  
 青龍神社 西町入口の山際あり此社の初ハ弘法大  
 師入唐の砌天台山青龍寺の鎮護神ハ佛法東漸の事  
 と祈り帰朝の後佛法守護神として醍醐又勸請し青

龍權現と崇めしとそ當山ハ大師登山ありて真言の  
 頭密と傳へらせし故其派下の僧等佛法擁護のため  
 醍醐より勸請せし神社なりと云へり  
 西町 八町と云ふ 山内西方あり市街の總称なり  
 四軒町 原町 袋町 水町 上中下 大工町 上中下  
 板挽町 以上十町也往時ハ此町々縦横又區と分ち  
 肆店軒と並べて尤も繁盛の所なりしう明治改革以  
 来漸く衰へて鉢石三町の盛なるも及ハレ  
 妙道院 旧跡 古此地の辺方今原町と唱ふ共 佛龍寺と  
 号元和七年天海大僧正中山の地あり釋迦堂と

泉山 卷之三 六



佛岩開山堂の下に移し後寛永五年客殿庫裡等悉く  
建立ありて妙道院と号し一山の葬送修行の精舎ふ  
定めらる同十八年今の地は轉營して法曼一流灌頂  
修行の道場と為り且元和年中より東照宮興宮迄傍  
に立置まるとる諸家の石碑と承應元年此寺内は移さ  
る自今諸家の石塔所と定めらる寺領二百石末  
山六四箇寺ありて堂々たる寺院なりしが時勢の變  
遷より從て終り廢跡とハなまじり

釋迦堂 妙道院境内の西方にあり南に面して七間四方  
宝形造本尊ハ阿彌陀脇士文殊普賢の座像其他惠心

僧都の作三尊の阿彌陀及慈眼大師現存の肖像勝道  
上人の位牌等と安置を往時此堂ハ常念佛の道場ふ  
して香花の匂麗らうと稱名の聲絶ぶらしと云ん  
殉死墓碑 五基釋迦堂の西にあり大猷大君の恩眷を  
擔て殉をる所なり

玄性院殿心隱宗卜大居士  
芳松院殿全巖淨心大居士  
理明院殿光徳徹宗大居士  
靜心院殿一無了性大居士  
真證院理哲玄勇居士

堀田加賀守紀  
朝臣正盛  
阿部對馬守藤  
原朝臣重次  
内田信濃守藤  
原朝臣正信  
三枝土佐守源  
朝臣守惠  
奥山茂左衛門  
尉藤原安重



以上五基共慶安四年四月廿日とあり此他慶長十五年より寛文八年又至る迄諸家の石塔十八基併て六三基二行に並列せり

延命地藏 釋迦堂の表門より西の道際小堂あり相並て小庵あり此地蔵尊の勝道上人の作にて湯元又安置せるを正徳年中此所へ移せりと云ふ

淨光寺 板挽町あり遷源山妙覺院と号す則西町の菩提所なり此寺元佛岩谷ありて淨光坊と号し六供僧の一をうしが應永年中故ありて善女神谷へ移せり又佛岩開山堂の辺又一山の墓所なり往生院と

云ふ寺あり此地ハ當山の鬼門より方と以て善女神谷へ移し後寛永十一年六供僧の坊と共々今の地へ移せりと云ふさまハ其頃より往生院と淨光坊と合併して淨光寺と稱せしよ此寺ハ昔往生院の重寶なる弘法大師書寫の額と蔵せり長さ二尺二寸幅一尺五寸四分外椽ハ雲龍と彫り内ハ亦一欄と設く欄外ハ小梵九字の後世欄内ハ妙覺門の三大大字の華と刺せり梵字ハ紺青地にて妙覺門の三字ハ金色なり  
下河原 長坂の下より西町へ通る道筋と云ふ南ハ大谷川の流よ沿ひ北ハ南谷へ接り家屋疎らみして道

尾山 卷之二 三



の北小稲荷の社あり又西町寄小昔東照宮の神馬を  
 飼置し所あり今猶馬場形もあり厩跡も存せり  
 秋元氏墳墓 南谷照尊院境内あり石塔ハ御影の角  
 石よて高さ八尺許幅二尺三四寸表面の上ハ梵點一  
 字其下ハ照尊院道哲恭安居士裏ハ秋元但馬守藤原  
 朝臣恭朝寛永十九 壬午 天十月廿三日と二行ハ鐫を  
 四辺ハ石の玉垣よて囲めり氏ハ東照廟造營の命を  
 奉じ勤勞を事多年猶永く神廟ハ事ハ人事を願ハ  
 山内の一坊と此所ハ移して寺領百石を寄附し歿後  
 の院号と以て照尊院と唱へしと云ふ

内區之三

本宮社 祭神味耜 日光三社の一なり社地ハ神橋より  
 良位よ方丘上ハあり前ハ大谷の流ハ臨ミ東北ハ  
 稻荷川を帯ハ老杉陰森として社地を圍繞せり始め  
 勝道上人四本龍寺と此丘上ハ營ミ尋テ南の清地と  
 トして三社權現と勸請ミ是當山社頭の權輿也大同  
 年間福利遠勅命を奉し社頭と新營して大觀を成と  
 云ふ爾來明德二年大永二年及永祿五年三四の火災  
 小罹りて悉く焼亡せり同七年再興の舉あり後正保  
 四年寛文四年兩度修理を加へらましく天和四年十

昇山殿 卷之二



二月蓮華石町より出火して一山の堂宇大半烏有となり當社も亦末社と保せて類焼せり之を日光山大延焼と云ふ翌年公命よ因て更ニ新營を乃ち當今の社頭なり

旧別所 本宮坂と右へ登るハ中程の左より素木造則本宮へ給仕する者の詰所なり

如法經堂 別所へ接して東より往時ハ三十番神及教是座主の影像と安置せしが神佛分離以來悉く四本龍寺へ移して空堂となせり

清水 別所の南の方往來の上よりあり勝道上人始て登

山修法の時關伽の水と汲まし所なりと是當山茅一の靈水といへり

笈掛石 拜殿へ向て左より高さ三尺五六寸此石ハ冬峰行者出峰の特笈と立掛る故に名所と

本社 拜殿 共ニ銅葺赤塗也此兩殿の間ニ中門を設け其左右より玉垣と廻らして本殿を圍ふ

三層塔 本宮社の後よりあり相傳ふ此塔ハ昔鎌倉將軍實朝公の建立なりと初め東照宮の社辺よりありしと

松平正綱の計らひにて此所へ移せしり天和四年の火災ニ罹り其後再建する所といへり

卷之三



三面大黒木像 三層塔の傍に安ん元ハ本宮の別所  
ありし物なり初め傳教大師佛法擁護のため叡山に  
安置せると當山よてゆ之と模造して各別所安置  
せると云ふ

紫雲石 三層塔の西南咫尺の所あり徑四尺許の平

石よて周圍に木柵を廻らせり往昔此辺に紫雲棚引

觀音大士の出現せると以て名附しと云ふ

四本龍寺 三層塔の西に並ぶ五間四面室形枋葺素木

造り中尊ハ千手大士左に五大尊右に勝道上人自刻  
の肖像を安ん則是道上人開法の旧刹也相傳ふ上又

未だ草庵に在し時毎夜神人來り告て曰く此北嶺を

四神峰と號し東に青龍南に朱雀西に白虎北に玄武

の所住也云云之に於て一坊と設て四本龍寺と号せ

る大同年間橋利遠勅命を受て改造せるみより始て

寺觀を大成し爾來數多の變革を経て現今の位置に

居まるといふ

唯心院 四本龍寺の西方東山谷にあり正保二年橋本

坊を改め古の衆徒の称号を立て、唯心院と号し此

所ハ勝道上人最初に草庵を結ハせし旧跡にして  
中庭に禮拜石と云ふあり徑四尺許の平石なり是ハ

唯心院 四本龍寺 勝道上人 草庵 禮拜石 徑四尺許 平石



昔紫雲石の方ふ當り千手大士の出現ありしと上人  
 此石上より禮拜せらしむ依て名附と又寺の西方ふ  
 硯石と云ふあり高さ四尺廻り九尺許の大石也是ハ  
 上人所持の硯と此石の下ふ埋めらまし故に名附と  
 又東北の立上人の高足仁朝僧都の石塔あり五輪  
 形にて如何にも千年餘の古物と思へる好事の雅客  
 ハ必に一覽あるべし

小玉堂 佛岩谷あり弘法大師の建立なり相傳ふ弘  
 仁十一年九月大師瀧尾に於て佛眼金輪の法を修む  
 一七日結願の夜池中より一小白玉と現れ是天補星

なりと因て一字と建立し其白玉と崇めて小玉堂と  
 稱せりと云ふ

彦坂光正墓 佛岩谷田護光院の境内ふあり塔八角形  
 の五輪にして總高さ五尺七八寸胴石に護光院殿正  
 宗居士其左右に寛永九年二月廿九日と記せり  
 氏ハ通稱と九兵衛と号を初め駿府の町奉行より進  
 て紀州の附家老となり家康公薨去の後職と辭して  
 當山に投じ髪を削り庵室と結て神廟ふ奉仕を事  
 數十年慈眼大師号と護光院と賜ふ歿後該庵と衆徒  
 の一寺と為て護光と号せり



教旻座主墳墓 旧大樂院庫裡の辺小塚あり往古より

座主の墓なりとて不浄と禁じ崇敬せり此辺ハ勝道

上人の墓なり近く昔ハ小笹の之ありし所と云へり

東照宮遷座後別所と經營せらるゝ初も謂き阿多塚

なまは其終に置ましむのど見ゆ師ハ勝道上人の工

是よりして上人の統と継ぎ嵯峨天皇の弘仁八年始て

座主の宣旨と拜賜を道上人ハ宣旨無まハ座主とい

云ハハ只開祖との之稱を故ふ當山の座主職ハ師と

以て始祖とせ 佛岩 東山谷より北へ續きて旧寺院坊舎のありし辺

と云ふ往昔西の山際ハ佛像ハ似とる岩三四個あり

しハ山崩きて其岩陥没せりと然まとも古くより此

地の名称といはまるとせ

開山堂 一名地藏堂 勝道上人窟 東照宮與宮の東佛岩の地ハあり

堂ハ東へ向ふ六間四方二重宝形造り四面ハ扉有て

間毎小窓と設く堂内ハ石甃にして正面ハ開先院の

額と掲ぐ一品公遵親王の染筆なり中央ハ地藏菩薩

の座像と安置を丈け五尺許運慶の作と云ふ須彌壇

上厨子の中ハ勝道工人の影像と安し左右ハ十弟子

の像と排列せり蓋し此辺と離布畏所と稱する者ハ



上之茶毘之地なりと以てなり

草創建立記曰勝道人下毛野國芳賀郡之人俗姓若田氏也其先者人王十一代活目入彦五十狹茅天皇第九皇子池速列命其十八代之孫稱高藤介歎無一子祈當國伊豆留觀音結願宵夢三尺余白蛇金鉢捧來而與焉其形八葉中納白玉以藤系纏之不經幾日其妻懷胎天平七年四月廿一日日中產出焉童名踰藤系於幼稚時造石塔砂堂崇神拜佛因茲諸童子名云興寺年七歲而供香花於天夜中神童來而云吾是天上聖衆明星天子也汝可興行佛法者也故授汝無師智云云天平勝寶

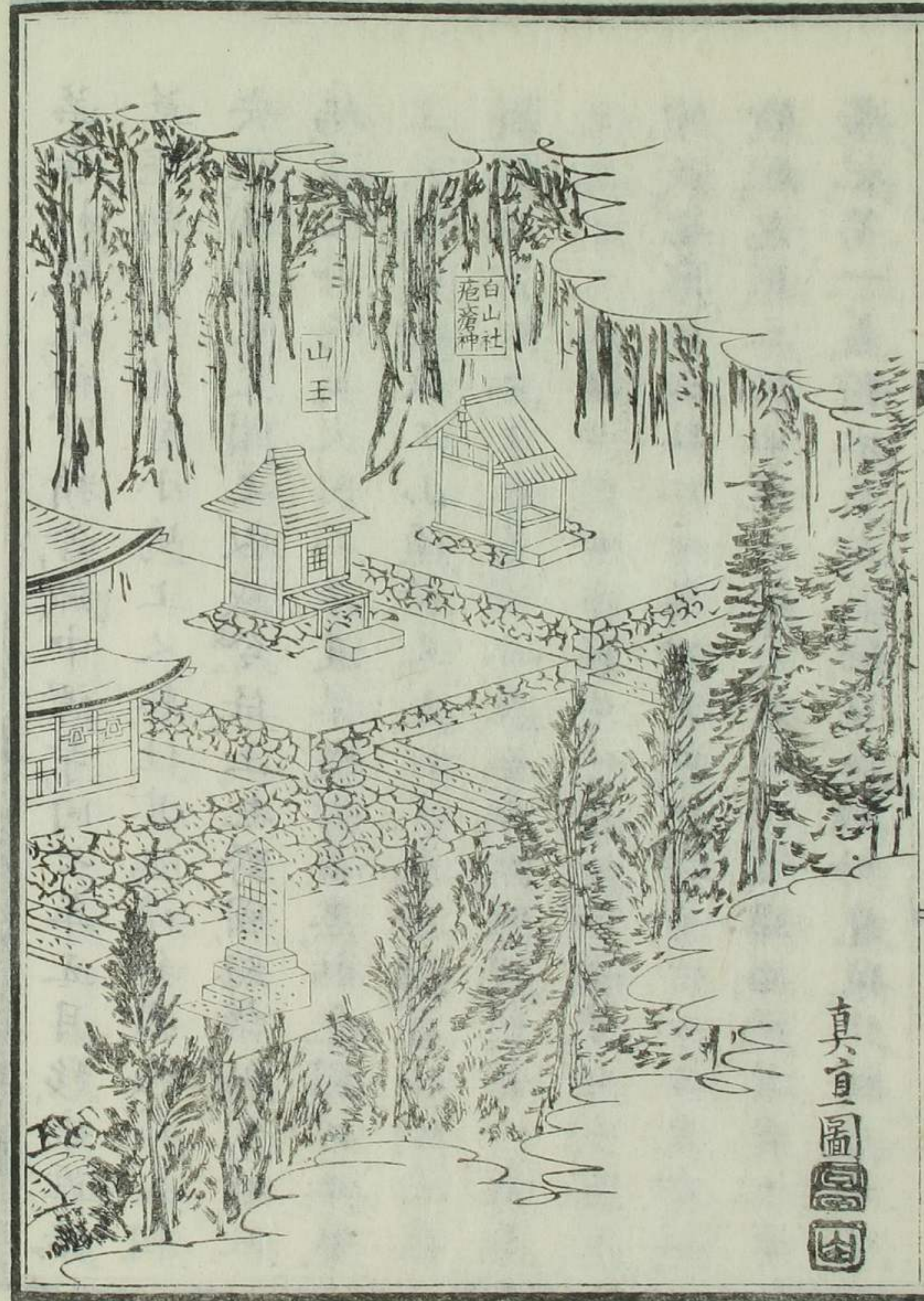
六年七歲之時夜偷到伊豆留岩窟念千手觀音誦三歸四弘法既送三春秋已天平寶字元年十一月八大劔峰深洞又送三年同五年正月到于當國大山鄉藥師寺不圖見如意僧都唐惠雲律師唐揚州人等稱善哉々々終隨律師德七七歲於藥師寺剃髮受沙彌十戒七十二威儀名巖朝而後自改號勝道天平神護元年三十一歲出寺歸大劔峰同二年三月上絶巔顧四方當北山四色雲常聳空中作奇異思向北方尋求到當山麓有一大河欲涉不容易于時上人誦三歸并求聞持咒即從河北涯化神出來放右手二蛇二蛇即亘河上其形如虹霓為橋上人渡蛇



橋屆北涯則遂宿念結草庵勤行焉有夜異人來語此所  
來由於此建堂號曰本龍寺矣神護景雲元年欲見絕頂  
攀躋高巔歷四十里許於嶽半腹有一大湖宿湖北岸經  
行念誦又欲登頂上路險雷吼振動更不得上從半腹還  
降同五月還本龍寺送十四箇年又天應元年四月起先  
志欲到山頂霖露變澱不得陟同二年三月率徒弟等至  
湖宿精勤修行一七日遂達山頂顧四方靈瑞銘肝勝區  
驚目經三箇日降湖宿又還本龍寺次延曆三年詣湖宿  
造船長二尺廣三尺棹湖遊覽先止南湖後住北涯同四月屆南  
湖歌濱見蛇人次至西湖現金色千手觀音同五月與徒

弟等相議建神宮精舍號中禪寺同七年五月移南涯結  
草庵勤行其前有小嶋上人暫住其嶋禮拜懺悔祈聖朝  
安穩柏原天皇聞之啟感令任上毛野國總講師因茲此  
嶋名上野嶋矣大同二年夏旱魃青苗悉枯乾國司奉屬  
上人令請雨故上山頂祈又至江尻巖念誦善神納受應  
時甘雨霖々依之以當國土產永奉獻權現是當山興森  
之起也大同年中於四本龍寺亦奉勸請權現祈朝家及  
國民安寧云云弘仁七年四月詣中禪寺一七日夜念誦  
讀經忽然三化神現一如天女以玉冠瓔珞飾其身一束  
帶把笏一着狩衣負武具隔庭異類神扈從化神告上人





真直圖

産宮

祭神不詳或云楊柳觀音也

開山堂

南の方にて周圍小玉垣

廻らし社前小鳥居あり土俗傳て姪娘の婦女將茶

子の形を作り香車と書して社壇小納むは安産を

事妙なりとて數多の茶子と納め置けりいつの頃

よりの俗習もや童ハ向ふ事速くをるの謂をならん

又此辺小陰陽石とて二つの奇石あり案をも此石

あり故小産宮も起りしり又ハ産宮の傍をるを以て

陰陽石と名つけしならん

瀧尾道

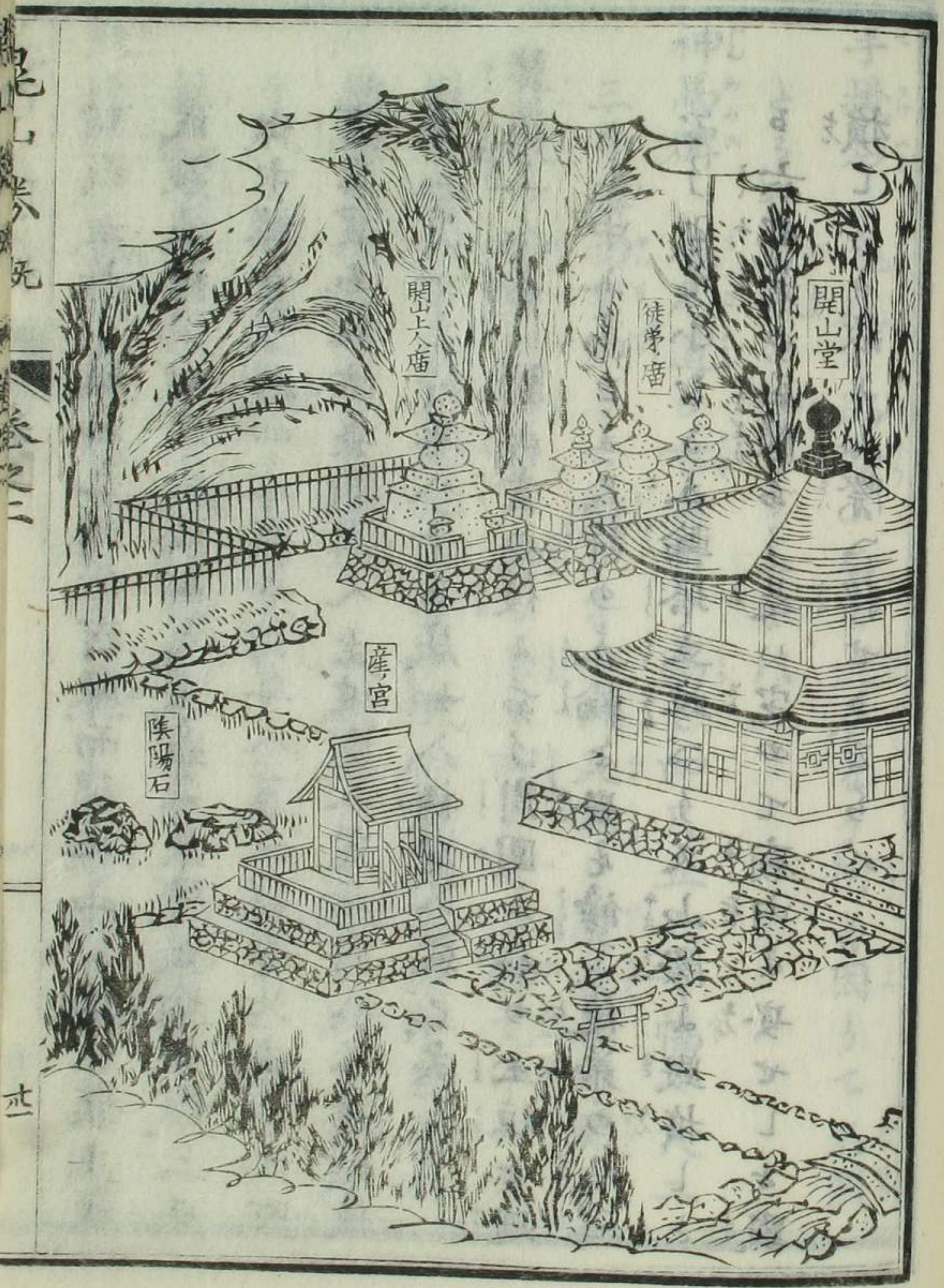
神橋より瀧尾社迄十八町と云ふ其順路ハ長

坂と登り直線ハ本坊の東と通りて旧大樂院の門前

真直圖



小至り夫より右或は左と同院の園を以て沿ふて行くの  
 開山堂の前まへより出でつつ開山堂を滝尾道と記せしは是より。  
 八町許漸々お登り社頭迄敷石つ續けり此辺の左方の  
 東照宮與宮の山傳わて懸崖高さ十餘丈右ハ稻荷川  
 の流を接せし老杉と雜木道と掩まふて日輝と見ゆ故に此  
 境ハ入る盛夏と虽も凄涼と侵して爽快なり。  
 天神社 瀧尾道左方の山際ハあり社頭ハ小なる石室  
 小して周圍ハ石柵と廻られ後の石ハ大なる梅鉢と  
 彫り傍ハ寛文元辛丑年二月廿五日聖廟ハ九世孫築  
 紫安□寺住菅原姓大鳥居氏法眼信幽敬白とあり



開山廟相  
 卷之二  
 一  
 二



曰我<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>鎮<sub>レ</sub>神<sub>也</sub>師<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>宿<sub>レ</sub>緣<sub>而</sub>開<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>公<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>本<sub>レ</sub>願<sub>主</sub>我<sub>レ</sub>  
成<sub>レ</sub>護<sub>レ</sub>法<sub>神</sub>俱<sub>レ</sub>守<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>法<sub>濟</sub>群<sub>生</sub>至<sub>レ</sub>盡<sub>未</sub>來<sub>際</sub>盟<sub>約</sub>去<sub>レ</sub>經<sub>三</sub>日<sub>ヲ</sub>  
出<sub>レ</sub>中<sub>禪</sub>寺<sub>室</sub>還<sub>レ</sub>四<sub>本</sub>龍<sub>寺</sub>同<sub>年</sub>八<sub>月</sub>本<sub>龍</sub>寺<sub>北</sub>去<sub>レ</sub>八<sub>九</sub>町<sub>ヲ</sub>  
有<sub>レ</sub>岩<sub>窟</sub>名<sub>離</sub>怖<sub>畏</sub>所<sub>上</sub>人<sub>至</sub>彼<sub>空</sub>入<sub>定</sub>所<sub>同</sub>八<sub>年</sub>遺<sub>誠</sub>徒<sub>弟</sub>  
弟<sub>三</sub>月<sub>一</sub>日<sub>行</sub>年<sub>八</sub>十<sub>三</sub>歲<sub>如</sub>入<sub>禪</sub>定<sub>入</sub>寂<sub>已</sub>矣<sub>ヲ</sub>  
勝<sub>道</sub>上<sub>又</sub>墓<sub>開</sub>山<sub>堂</sub>の<sub>後</sub>又<sub>有</sub>周<sub>圍</sub>石<sub>の</sub>玉<sub>垣</sub>と<sub>廻</sub>  
らし<sub>中</sub>小<sub>高</sub>五<sub>尺</sub>許<sub>の</sub>五<sub>輪</sub>と<sub>安</sub>傍<sub>の</sub>徒<sub>弟</sub>の<sub>石</sub>碑<sub>を</sub>  
な<sub>り</sub>と<sub>て</sub>小<sub>なる</sub>五<sub>輪</sub>塔<sub>立</sub>並<sub>べ</sub>り<sub>又</sub>山<sub>際</sub>に<sub>毀</sub>損<sub>し</sub>と  
る<sub>六</sub>部<sub>天</sub>の<sub>石</sub>像<sub>あり</sub>是<sub>ハ</sub>定<sub>めて</sub>廟<sub>内</sub>に<sub>安</sub>せ<sub>し</sub>と<sub>毀</sub>  
損<sub>し</sub>と<sub>る</sub>故<sub>に</sub>山<sub>際</sub>へ<sub>移</sub>せ<sub>り</sub>なら<sub>ん</sub>

手<sub>掛</sub>石<sub>瀧</sub>尾<sub>の</sub>路<sub>傍</sub>に<sub>あり</sub>大<sub>石</sub>なり<sub>何</sub>に<sub>因</sub>り<sub>て</sub>名<sub>附</sub>  
と<sub>る</sub>や<sub>由</sub>來<sub>と</sub>詳<sub>ら</sub>ず<sub>ふ</sub>せ<sub>り</sub>  
神<sub>馬</sub>碑<sub>瀧</sub>尾<sub>道</sub>の<sub>右</sub>に<sub>あり</sub>高<sub>さ</sub>四<sub>尺</sub>五<sub>六</sub>寸<sub>幅</sub>一<sub>尺</sub>二<sub>寸</sub>  
三<sub>寸</sub>碑<sub>面</sub>磨<sub>滅</sub>して<sub>槌</sub>を<sub>ら</sub>れ<sub>此</sub>馬<sub>ハ</sub>慶<sub>長</sub>五<sub>年</sub>關<sub>原</sub>  
合<sub>戦</sub>の<sub>砌</sub>東<sub>照</sub>神<sub>君</sub>の<sub>御</sub>し<sub>玉</sub>ふ<sub>所</sub>と<sub>云</sub>ふ<sub>碑</sub>文<sub>中</sub>に<sub>大</sub>  
樹<sub>薨</sub>御<sub>明</sub>年<sub>致</sub>馬<sub>於</sub>此<sub>山</sub>歷<sub>十</sub>有<sub>四</sub>歲<sub>寛</sub>永<sub>康</sub>午<sub>歲</sub>薨<sub>於</sub>  
槽<sub>櫃</sub>之<sub>間</sub>云<sub>云</sub>の<sub>文</sub>字<sub>灰</sub>に<sub>見</sub>へ<sub>り</sub>之<sub>を</sub>以<sub>て</sub>考<sub>ふ</sub>  
む<sub>ハ</sub>三<sub>十</sub>歲<sub>小</sub>超<sub>へ</sub>る<sub>べ</sub>く<sub>實</sub>小<sub>長</sub>壽<sub>の</sub>駿<sub>足</sub>と<sub>云</sub>べ<sub>し</sub>  
梶<sub>氏</sub>某<sub>懷</sub>旧<sub>の</sub>情<sub>小</sub>堪<sub>へ</sub>り<sub>碑</sub>銘<sub>と</sub>遺<sub>せ</sub>り<sub>と</sub>聞<sub>け</sub>り  
飯<sub>盛</sub>杉<sub>瀧</sub>尾<sub>の</sub>道<sub>端</sub>に<sub>あり</sub>大<sub>木</sub>なり<sub>周</sub>圍<sub>二</sub>丈<sub>三</sub>四<sub>尺</sub>

龍山卷之三 三



枝葉枯朽して老幹の存するの之是より數歩の所ふ  
枋門とて瀧尾の惣門なる鳥居ありしは先年朽倒を  
て今ハ只礎石を見らるる

瀧尾社心祭神田 弘法大師の建立なり相傳ふ弘仁十一

年大師始て登山して四本龍寺の室ふ入り勝道上人

の遺弟教是道珍等と俱ふ瀧尾ふ至り其靈境ふ感し

大杉樹の下ふ庵と構へて勤行を更ふ壇と設て秘法

と修する事一七日既ふして神女の冥勅と蒙る因て

神靈と中禪寺ふ祀り社壇と此岨上ふ淑立し自ら女

體中宮の四字と書して題額と為せりと此歳十二月

大師上洛して奏聞と遂け瀧尾を以て御願寺と為  
當時嵯峨帝の御宇なるがゆふ嵯峨帝の御願寺と  
稱せりと云ふ

牛王橋 瀧の下流ふ架せり石橋なり此左方の山際ふ

山玉の社あり

不動堂 道の左石階の下ふあり堂ハ二間四方枋葺黒

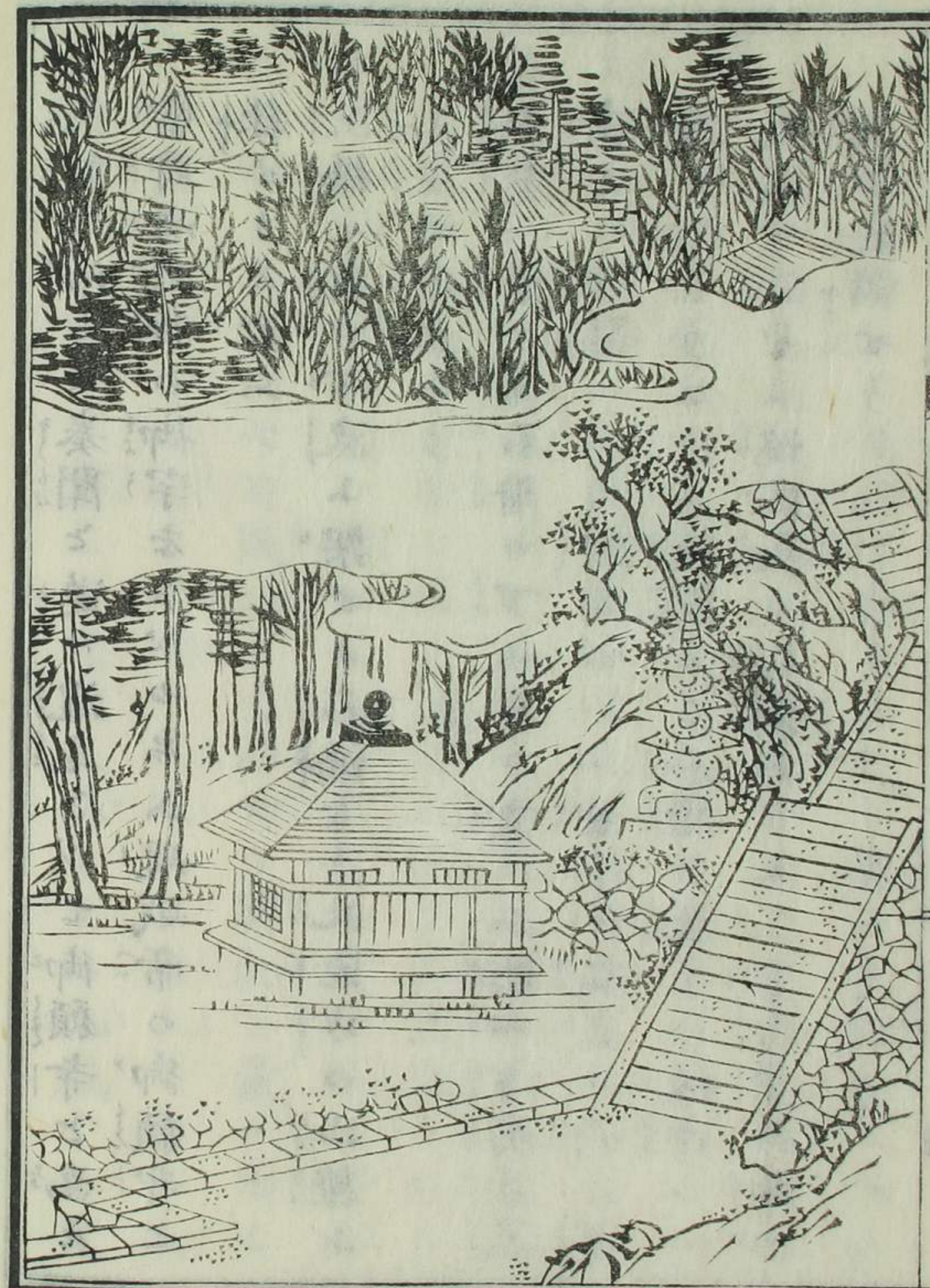
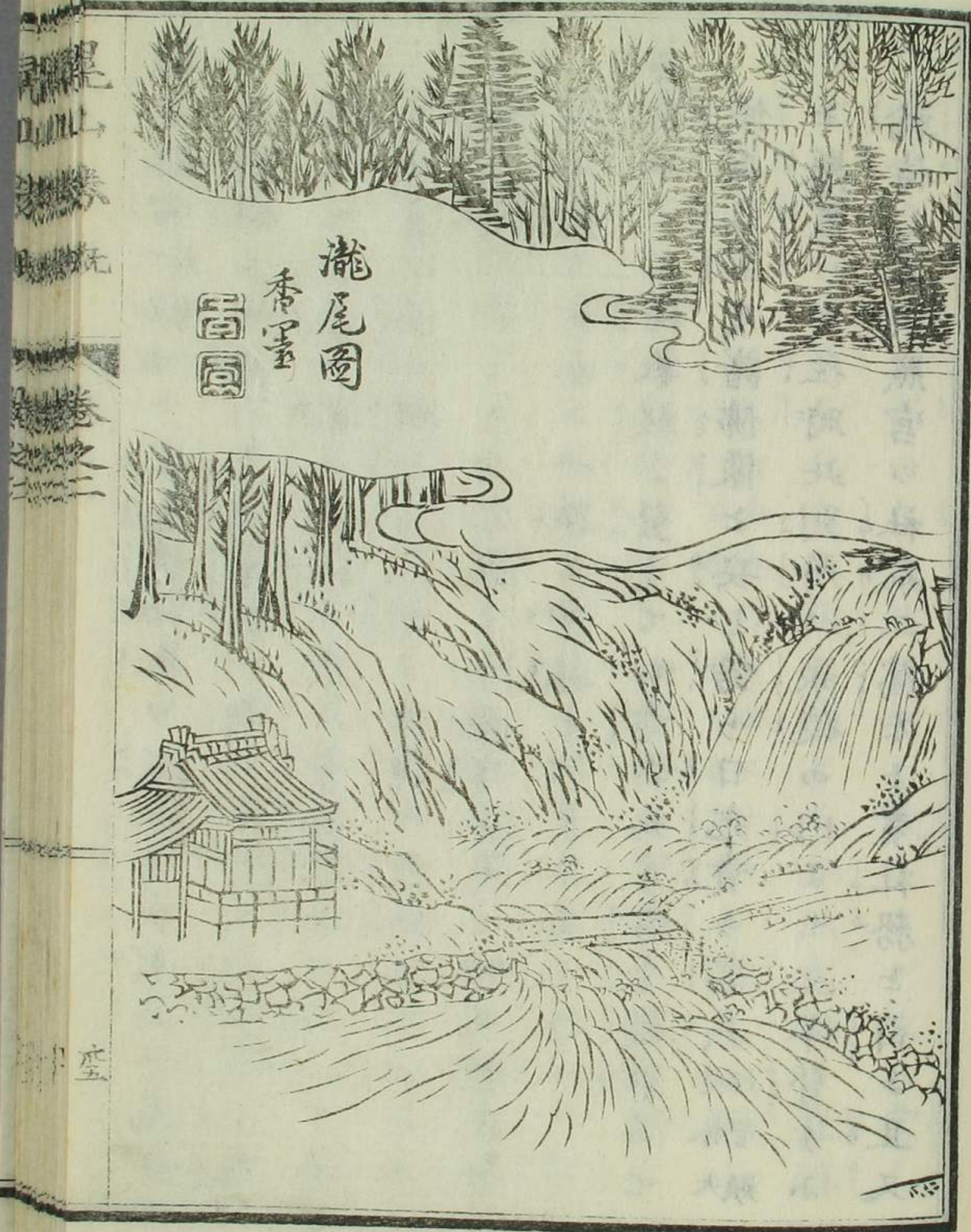
塗なり本尊ハ二尺許左右ふ二童子と安置と共ふ運

慶の作なりといふ此脇より石階と登出ハ坂中ふ一

尺五寸許なる焼不動の石像あり又三笠赤倉の兩小

祠と勸請せり





真山勝地  
卷之二



龍尾瀑布一名白 不動堂西北の岩上より飛流を高さ  
 二丈許り此瀑ハ古来有名の物をせとも尋常の小龍  
 小して白糸の名も似に或ハ索麩龍杯と唱ふる者  
 もあまよと益々據所なし定て此奥と索麩谷と云より  
 誤り傳へたるならん斯る小瀑布なせと回國雜記等  
 よも載てあまよハ一槩ハ塗抹せべきあらん  
 舊別所 石階數級を登りて右方ハあり方今頽廢して  
 假ハ二王及諸佛像と安し傍ら日光責の器具煙管類  
 と懸置けり往時此別所ハ衆徒の内よて五年替りハ  
 輪持し又東照宮の社家二薦なる者社務と司る且又

當社の寶物珍器ハ凡て此別所ハ藏するが故ハ常人  
 に入ざる坐席もあり又額の間とて弘法大師の筆跡  
 女體中宮の古額當時樓門ハ掲げとると藏する所ハ  
 有て堂々よる別所なりしが時勢の變遷ハ隨て斯く  
 頽廢せる事止と得ざる所なり偕日光責の古式ハ當  
 別所ハ濫觴せりといつ項もや地蔵人間ハ變じ來  
 りて索麩と乞けるを責しより始まるといへり又  
 路いぶしの祭儀も此別所ハ原と云ふ  
 因ハ云日光市中の風習ハ祭典婚儀等の吉事ハ  
 來客ハ食物と強付て饗應せると例とて是皆日光



責の餘風小出る所と聞けり

如法經堂 別所の西小接を方三間阿彌陀佛と安を

影向石 經堂の西小あり往時弘法大師登山の砌此石

上より女體神影を拜させしと云ふ

石鳥居 樓門外六間許の所小建てり高さ一丈二三尺

梶氏の獻寄とる所なり

樓門 三間小二間許總赤塗也弘法大師の筆女體中宮

の額ハ此樓門小掲けありしと今猶額塚と存也

拜殿 樓門の正面なり四間小三間總上蔀ハ黒塗他ハ

瓦て赤塗なり

中門 間口九尺許素木造り此左右より玉垣と廻らし

て本社と圍む門内本社の前小禮拜石と名附小平石

あり徑三尺餘周圍は手摺矢來と設く土俗云ふ日光

責にて氣絶せし者と此石上小置けハ忽ち蘇生すと

故は助石とも唱ふるとり石又門外左右の石柵内小

篠を栽とり是ハ神箭を作り料なりと云ふ

本社 東南小向ふ桁行三間梁間二間大床造り二重檼

向拜あり柱ハ金欄卷前の三扉ハ黒塗其他彫物彩色

減金の飾等頗る美麗なり

本地堂 拜殿の西小あり二間四方赤塗なり惠心僧都



の作なり阿弥陀觀音勢至の三尊を安置す  
 千手堂 本社の西あり二間半四方黒塗なり本尊ハ  
 丈六の立像開祖上人の作なりと云ふ  
 多寶鏡塔 千手堂の後あり堂ハ一間四方内ハ鏡塔  
 を置く高さ一丈許古色栴をべし塔内ハ普賢を安す  
 又塔腹ハ銘あり上欄ハ奉新造龍尾山鏡塔光明院法  
 印昌宣願主文月坊と下欄ハ文明二天庚三月十二日  
 大工宇都宮住人大和太郎宗弘と記せり  
 三本杉 奥院の神木なり本社の後あり當りて石柵を廻  
 らし前ハ鳥居有内ハ障三百と号する石碑あり苔む

して字躰を辨せし則ち瀧尾權現の出現せる所と云  
 へり相傳ふ此三樹ハ神代よりの古木なりしが中の  
 杉ハ元祿十二年八月十五日夜大風の時倒る右の杉  
 ハ延享四年八月廿七日ハ倒る左の一本ハ寛延二年  
 六月十二日風無くして倒る其倒る物今猶存せ  
 星周回三丈餘り其朽幹ハ尺餘の雜木數本生茂れり  
 方今の三本杉ハ古杉の倒る跡ハ自生せる物と  
 云ふ今既ハ長じて廻り八九尺ハ至まり  
 石碑 旧水戸藩の儒官森尚謙ハ撰る所ハ瀧尾  
 權現の靈異なる事を記せる碑なり畧す



酒泉さけのふ池いけ本名功徳もとく徳三本杉さんぼんせきの西にしの方ほうあり池いけ中ちゆう辨べん才さい天てんの

小祠せうしと祀まつせり往昔むかし池いけ中ちゆうより酒泉さけのふの涌もみ出いせるを以もつて

名な附つとりと云いつり

子種こね石いし酒泉さけのふの西にしあり高さ五尺許ごせきご徑けい六七尺ななせき四辺よへあり

石柵せきさくを廻めぐらせ里俗りじやく傳つとて子こをまき女おんな此こゝ石いしを祈いのせむ必かならず

効驗くうけんありと云いふ是こゝより下くだ向道かうどうなり

筋違橋すぢごゑ此所こゝの瀧尾たきおの地界ちがいにして則すなはち下向道かうどうなり此

橋はしハ用水路ようすいじよへ架かせる故ゆゑふ都みやこて不淨ふじやうを禁いしめ傍かたわらに

大小たうせう便べん無用むじゆうの石いし票ひょうと建たより橋はしの南みなみなる坂路さかぢを登のぼる

ハ直ただち小行者堂せうぎやうだうに至いたる

行者堂ぎやうぎやうだう 筋違橋すぢごゑより登のぼりて二荒山ふたあらいやま神社しんじやへ降くだる坂さかの頂たか

上うへふあり本尊ほんそんハ役小角やくせうかく左右さゆうハ前鬼ぜんき後鬼ごき共とも運慶うんけいの

作まなり此堂こゝだうの脇わきより此こゝへ入いるの逕路じやうぢよハ則すなはち峰みね修行しゆぎやう

者ものの禪頂ぜんていなる首途くしゆとの所ところと云いふ

天狗堂てんぐだう 二荒山ふたあらいやま神社しんじやの後のちなる山上やまの上ふあり堂だうハ三間さんかんあり

二間にかん南みなみふ向むかふ堂だう内うち多く天狗てんぐと圖ずせるを以もつて天狗堂てんぐだう

の名なありと相傳あひつとふ寛永十七年かんえいしちしちねん將軍かみぐん家祈願けまがいのの事ことあり

為な小天海てんてんかい僧正そうじやう手てつゝら繩なはを曳ひて建立たてりし慈惠じゑ大師だいしと

勸請くわんきやうして成満じやうまんと祈いのる故ゆゑふ當時とうじ慈惠じゑ大師だいし堂だうと称なづせり

保たもし神廟しんべうの背後かゝに在あると以もつて參詣さんぎと許ゆるさるしと



内郭之一

稻荷川 水源ハ女頼山の七龍ハ發シ外山の麓を回流  
 して大谷川ハ注ク此川の平常水少ナク是れ洪水  
 激流の時ハ當リテ下流の人家水難ハ遭遇スル者  
 舉テ算フべシ其一二を記セバ天文年中の洪  
 水ハ白鬚水ト云フ覺ハ老人ハ故也寛文二年六月の大  
 雨ハ大谷川稻荷川一時ハ出水其時赤蘿の山崩きて  
 大石を漂ハシ山中震動して激浪速クハ漲キリ来リ  
 稻荷町一町残の内萩垣町鍛冶町此町々元本宮の及ハ  
 御目附屋敷と合せて三百余戸押流させ死生を必の

三百有余人且在番の目附主從外ハ往來の旅人ハ溺  
 死スル者多クリシト又天和三年六月の洪水ハ稻  
 荷川より大石を轉ハシテ大谷川を堰止め漲水神橋  
 とお越シ假橋の欄干橋板等流失セリ故ハ貞享二年  
 五月の洪水後粟木淵より稻荷川の落合と開鑿して  
 北へ廻ハシ同四年九月五年七月の洪水ハ神橋の  
 兩袂ハ水湛へテ往來と止ム其後數度の洪水ハ損害  
 と蒙ル事筆セリ不遑あらハ實ハ恐ルベキ谷川也  
 外山 神橋より乾位ハ方り稻荷川の北岸ハ直立スル  
 孤山なり麓ハ二基の石鳥居建テリ夫より山巔まで



尾山  
山  
山  
山



平

外山稻荷川



松  
園

尾山  
山  
山  
山  
卷之二



六七町半腹以上ハ尤嶮岨（いさ）にして木根岩角（きねいわかく）小縫（こぬい）りて  
登（のぼ）る所（ところ）あり頂上（いただき）ハ毘沙門堂（びさもんどう）及籠堂（かごどう）と築造（きずく）を共（とも）ハ  
石造（いしぞう）なり其後（そののち）の方輿院（ほうおのゐん）とも思（おも）ひし所（ところ）ハ石宝殿（いしほうでん）或（ある）ハ  
種々（しゆしゆ）の石碑（いしひ）立竝（たつらひ）べり此山（このやま）ハ山頂（やまいただき）尖（とが）りて樹木（じゆもく）少（すく）なく  
東方（とうほう）數十里（すうじゆり）と望（のぞ）むべし昔將軍家（むかししやうぐんけ）登山（とんざん）の砌（せき）ハ此所（このところ）と  
遠望（えんぼう）臺（たい）ハ充（み）らむしと云（い）ふ

興雲律院 稻荷川（いなりがわ）の北岸（きたがし）ハあり天台律（たいたいりつ）なり享保年中（きやうほねんちゆう）  
座主（ざす）公寛（こうかん）法親王（ほふしんおう）の開基（かいき）ムして開山（かいざん）と玄門（げんもん）和尚（おしょう）と称（な）す  
其樓門（きろうもん）ハ聞薰閣（もんくわんかく）の額（がく）と掲（か）げ佛殿（ぶつでん）ハ威光殿（いこうでん）の額（がく）と掲（か）  
く又一切（またいっせつ）經藏（きやうざう）ありて覺寶藏（かくぼうざう）の額（がく）と掲（か）けとり此地（このち）ハ

人煙（にんえん）ハ遠く境内（けいん）杉樹（しんじゆ）森々（しんじゆ）として頗（た）る幽邃（ゆうすい）なり

菽垣面 律院（りつゐん）の近傍（きんぱう）北（きた）より東（あづま）ム直（ただ）る地（ち）と云（い）ふ元稻荷（もといなり）

川の辺（のへ）ハ菽垣町（しゆけんちやう）と云（い）ふ町（まち）並（なら）みありしハ寛文二年（くわんぶんにに）の

洪水（こうずい）ハ流失（りうしつ）し其後（そののち）同町（どうちやう）の畑地（はたけぢ）ハ佳（よ）き故（ゆゑ）ハ菽垣面（しゆけんめん）

と唱（な）へしなり然（しか）るハ土人（とにん）等附會（とうぶくわい）の説（せつ）と設（ま）け面（めん）と云（い）ふ

と誤（あや）り半缺（はんけつ）とる古面（こめん）一個（いっごう）天（あま）より降（くだ）るとと以（も）て地名（ちやうめい）

と為（な）せりと亦（また）一笑（いちやう）をべし（し）神領村（しんりやうむら）名寄（なよ）日外山（にげしやま）村（むら）と云（い）ふ

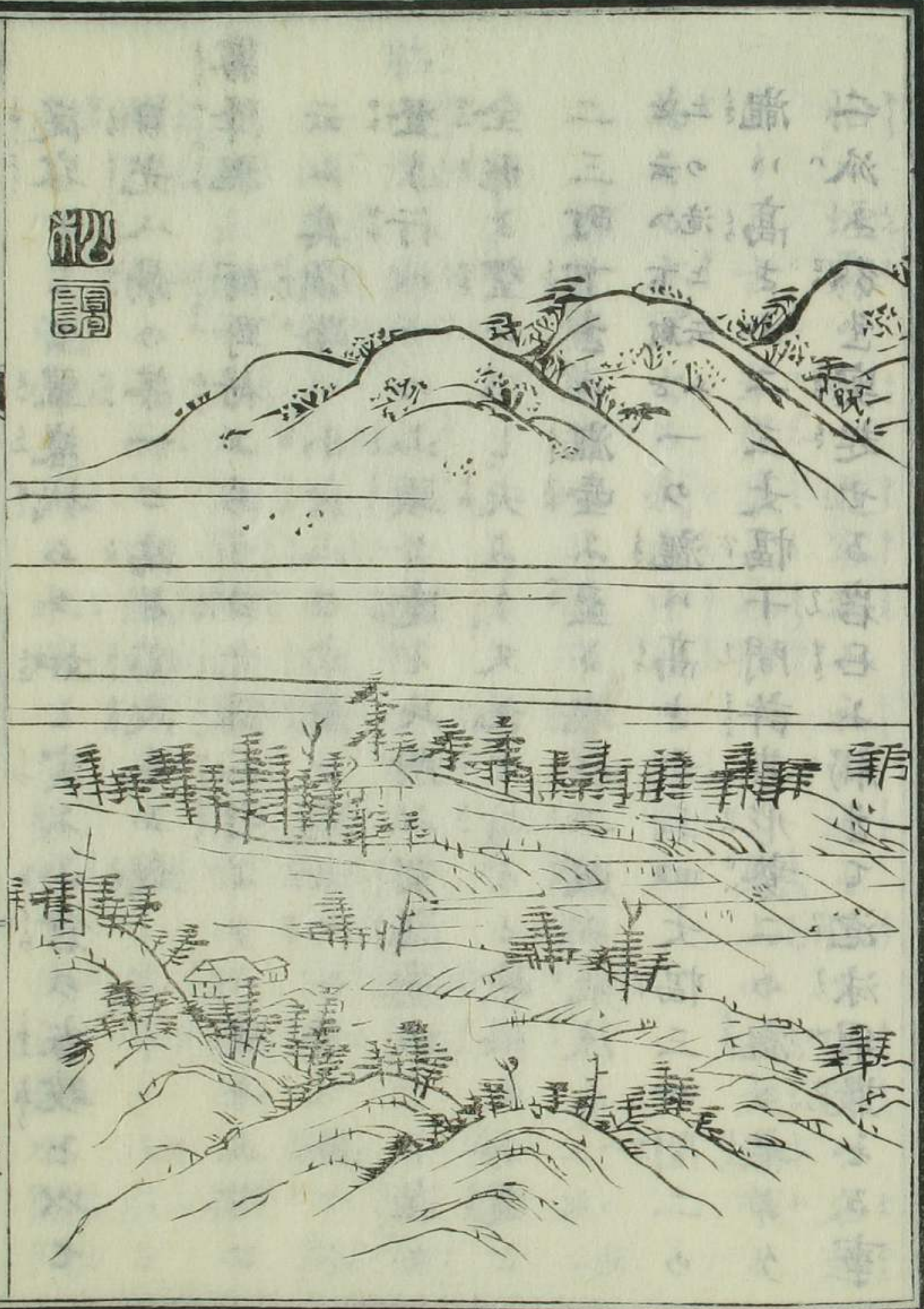
小倉山 菽垣面（しゆけんめん）の北（きた）ハ聳（た）ゆ此山（このやま）高（たか）らばと雖（な）も峰頭（ほうとう）

ハ雜樹（ざつじゆ）並列（なら）して風景（ふうけい）絶佳（ぜつた）なり此一山（このひとやま）ハ晃山（かうざん）の諸嶽（しよたつ）

と異（こと）なり岩石（がんせき）の突兀（とつごつ）もなく登攀（とんぱん）の嶮岨（いさ）もなく山勢（さんせい）



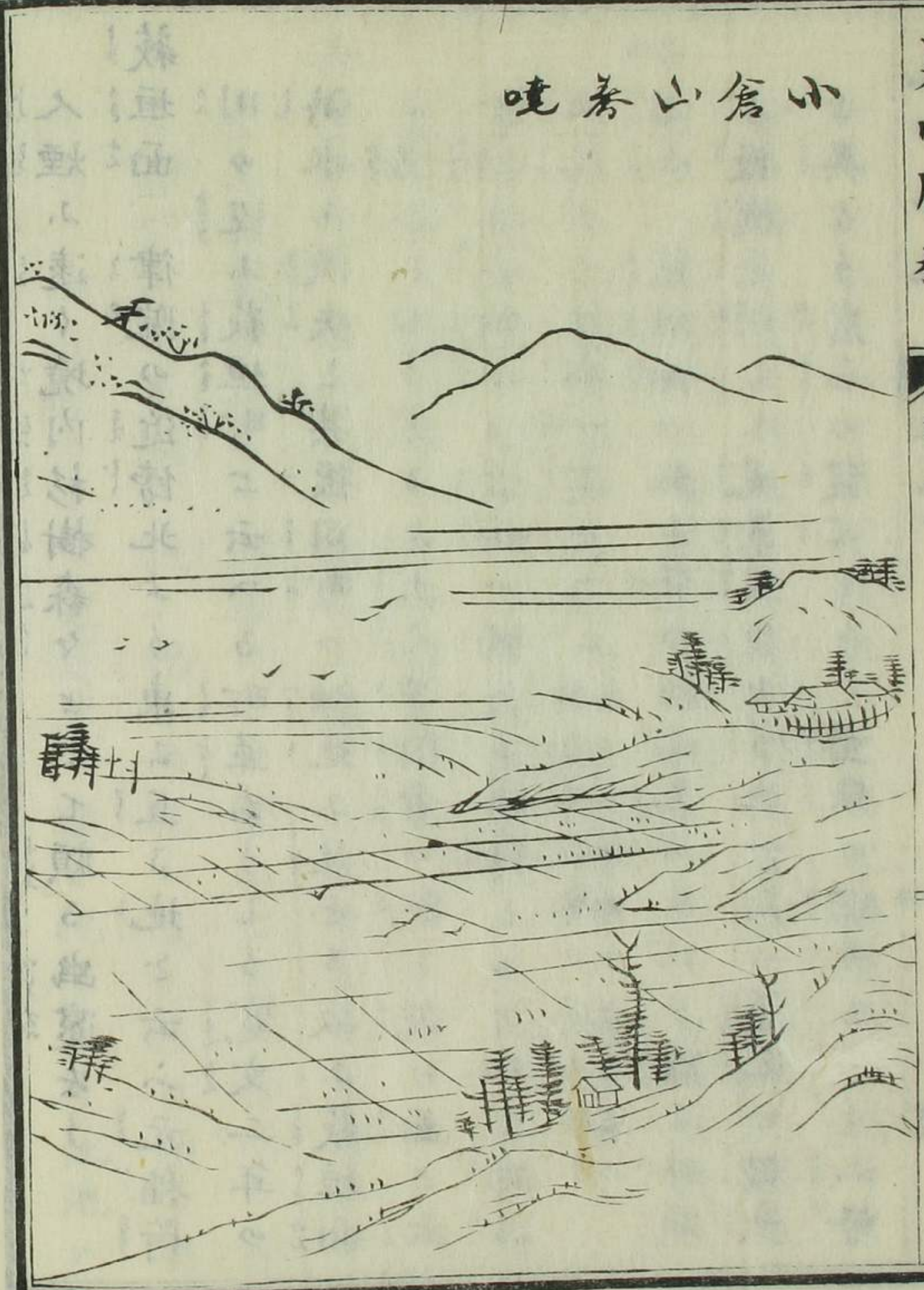
名山卷  
一



松  
圖

里

小倉山考



名山卷  
一

卷之二



從容として翠嵐拭らう如し実小倉の春曉と以て  
日光八景の第一と為と亦故ある哉

霧降瀧 所野村ふあり日光鉢石町より一里十五町と

云ふ其順路ハ小倉山の南麓と過西北の方へ漸々ふ

登り行ハ一の山頭より達と此所小望瀧臺ありて瀧の

全形と望むべし夫より又九々折をり嶮隘の小道と

二三町下せハ瀧壺ふ至る瀧ハ二級小飛流也一級と

と云ハ下級と云ふ一の瀧ハ高さ十三四丈幅三四間二の

瀧ハ高さ十二三丈幅十間許其形勢二の瀧の半より

二派ふ分れ突起せる岩石小觸きて泡沫飛散せる事

恰も煙霧の如く遊客為小衣と濕を依て霧降の名起

せりと古人華嚴裏見霧降と以て吳山の三大瀑布と

為と亦宜なる哉雪中庵の俳句小

鳥者驚慈悲心耳瀑布者洗止觀胸

雪中庵 蓼太

胎内瀧 霧降の上流十餘町の所ふあり其高さ五丈幅

三間許霧降ふ似て小なり瀧の四辺ハ圓形の懐と為

し只正面一方九尺許開け岩石左右ハ對立して恰も

関門ふ似たり而して瀧壺ハ井の如く其深さ人身を

没せし瀧壺の前も水湛つて碧潭と為其水関門



龍山  
卷之二



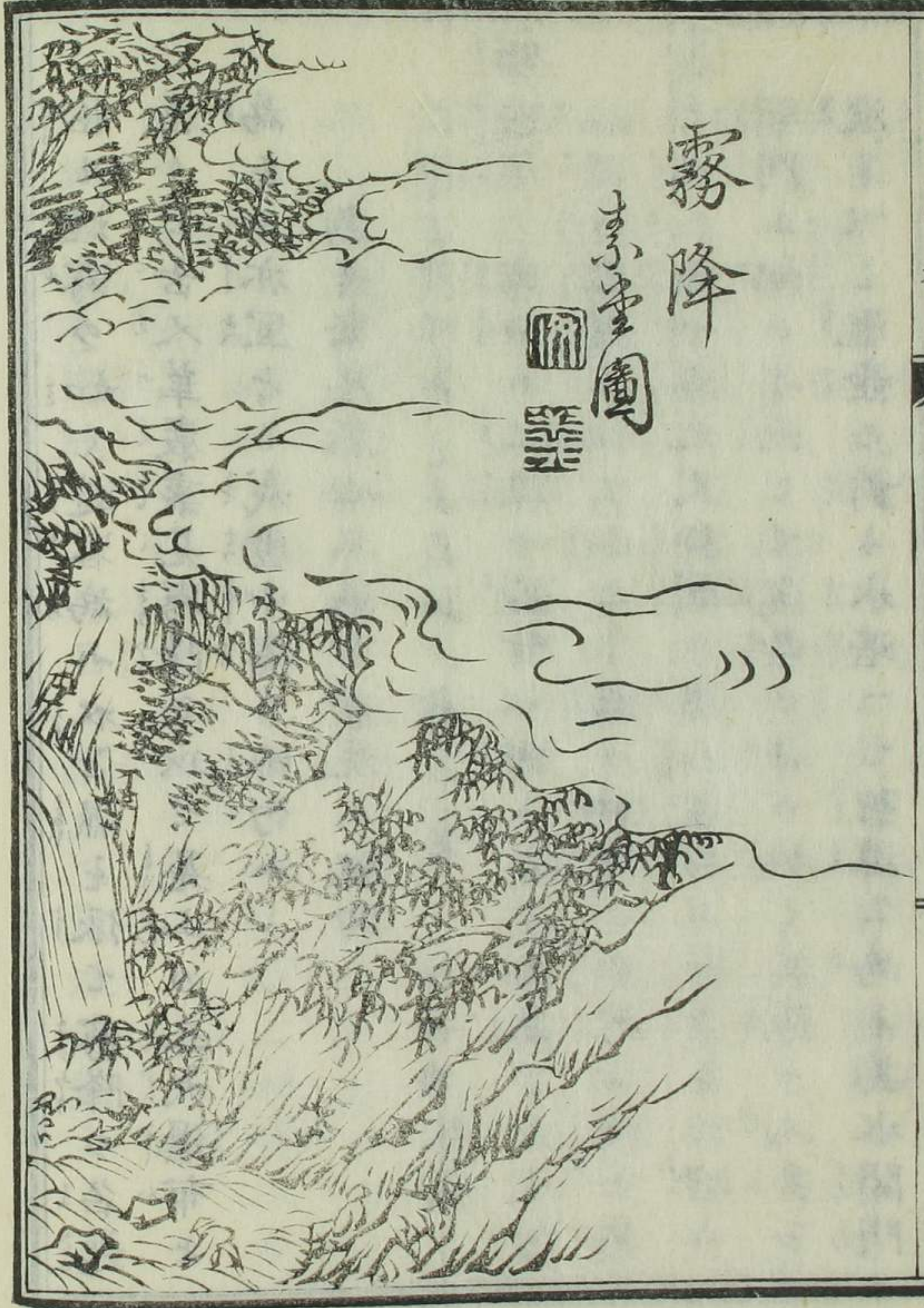
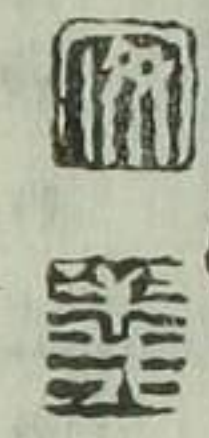
里

吳山  
卷之二

卷之二

霧降

素堂圖





外とみ溢あふきて一ひとの泉池いづみいけと為なせり此池このいけハ切岸きりぎしより水深みづあは  
く四辺よっぺんの岩石がんせき自ら位置ちゐちと具もへて人ひと工たくらみ異ちがふらば此  
所ところみ佇立たふらして瀧たきを望のぞめハ内佛うちぶつを拜まはるの思おもひあり  
因よて胎内瀧たうないたきと名附なづけしヤ又ハ霧降きりふりを産うむるの謂いふ共とも  
み名称なづかを誤あやまらざるものと云いべし

滑川なめがわ瀧たき 霧降きりふりの下流くだり小百村こひゃくむらより日光町にっこうまちより一里許いちりこほ  
瀧たきハ則すなはち滑川なめがわの流水りゅうすい岩石がんせきの直下ちかをる所ところを降くだるもの  
みして其高たかさ二丈許にじやうこほ幅ひろ十五六間ごじゅうろくま水勢みづせの盛さかなること  
諸瀑布しよばふみ冠かむとる此上流このかみハ幅ひろ十四五間じゅうごま數町かずまちの間ま一投ひと  
の岩石がんせき相連あひつらり質白しつしろく水清みづきよらうみして頗さかる清潔せいせつなり

且水かつみづハ淺深あさふかなく僅わずかみ脛ひざを没もせりみ過あり故ゆゑみ行人ゆくお水  
と渡わたりて往復きやくふせりと常つねとを  
生岡神社なまがわじんじゃ高彦根命たかひこねのみこと 街道かどう筋すぢ七里村しちりむらの西にしの路傍ろぼうみ生岡  
大日道おほひるみちと銘なづせり石標いしひょう二柱にむら建てり其左そのひだりをる坂路さかぢと二  
三町登さんまちのぼせり社頭しゃとうみ至いたり此所このところハ上野村かみののむらの地ちにて社頭  
の辺のへを生岡なまがわと唱なふ相傳あひつたふ往古むかし弘法大師こうぼうだいし初はつて二荒登ふたあらい  
山の砌のき爰こゝハ山麓さんろくなまハ先まづ此所このところハ錫しやくと停とどめ草庵くさいあんと結むす  
て暫しばく法はふと修しゆし手てつうら大日おほひる如来にょらいの像ざうと刻きして草  
庵いあんみ残のこささる旧跡きゅうせきなりと其後そののち堂宇だううも莊嚴じやうげんみ新營しんえい  
し寺院坊舎等しじやうぼうしゃらうらうらも數字すうじ立竝たつらび生岡大日堂なまがわおほひるだうと称なづして繁



盛なる土地なりしとや然るも星移り物替りて寺院坊舎も廢跡となり只大日堂のみ存しありしを先年大杉倒れて堂宇も共倒れ加るも明治維新の改革も及て更も佛跡を廢し鎮護の一社の之を再建せりと云ふ然るも土人等今猶生岡大日或は上野の大日堂と稱せり

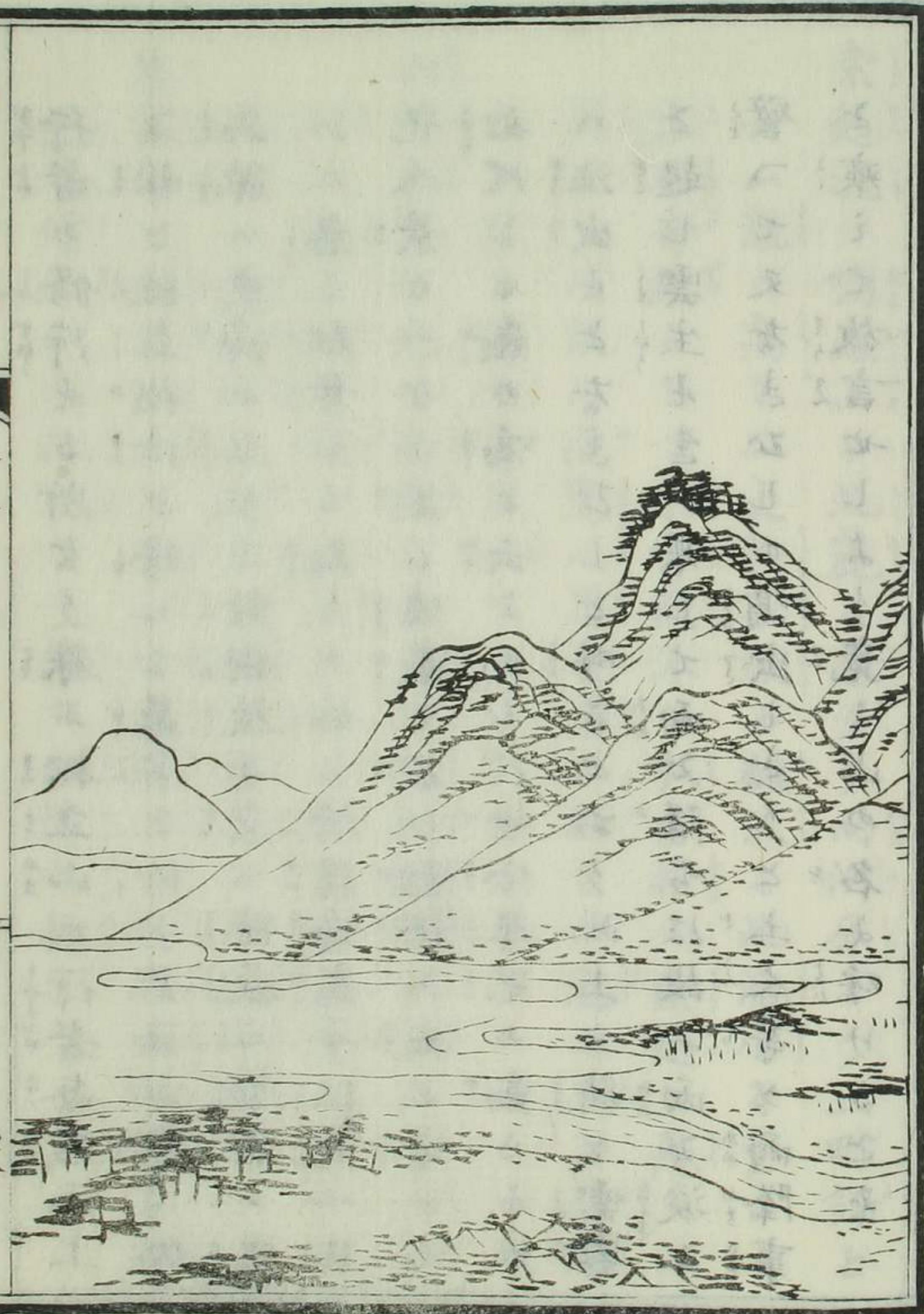
山王社 社地ハ野口村に在て七里村に隣る生岡大日堂より南の方にて峰を分てり嘉祥元年慈覺大師の草創にて山王と勸請せり所なりと往時ハ社僧二十坊ありて社務を司り又大日堂を兼持しける故も

頗る繁榮ふ至りしと追々日光山と異儀と生し坊舎以下悉く破却せらるる一時も衰頽せり其後大日堂の法會及山王の社務等ハ日光山にて司掌せしり神佛分離以来更も神職の手も歸せりと云ふ

神主山 鴻巣と書む 日光石屋町辺の南に方生る山也麓より山頂まで一里許此辺ハ都て童山にして東南數十里と遠望をべし

鳴蟲山 神主山の西に峙てる高山なり本名を大藏法嶽と云ふ其後ハ聳えりを小藏法嶽と稱す其外月見二宮松立等の諸山ハ此山脉中ハ元立せり共ハ冬峰





天

鳴崑山圖



鳴崑山圖



行者の修行せる所なり殊小松立山の行者毎歲山上  
小松と植立秘法を修して昇平を祈ると云ふ都て此  
山脉の東西より亘りて雜樹枝を交へ晩秋の繁霜に遇  
ひに悉く紅葉して画くが如し所謂鳴蟲の紅葉に日  
光八景の一なり蓋し鳴蟲の名に鄙語も出る者まで  
必だしも蟲の鳴と云ふあらば世俗嬰兒の動もそれ  
に泣出るとなきむしと呼ぶことあり此山も時々雲霧  
と起し雲生じ生ら果して雨と降らば故に雨と涙と  
譬へて又なきむしの鳴出しよりと土人等々雨降事  
と疾きて放言せしより竟も山の名も呼けりとそ

索麪瀧 鳴蟲山の北麓に懸る向河原より三町餘と  
云ふ瀧の高さ二丈許數級に翻流せ此瀧小なまるとも  
岩石奇絶にして水勢數派に分ち恰も索麪と懸る小  
異ならば故に遊覧人足と濡さばして瀧の上を昇降  
する事と得亦奇と云べし  
向河原 日光の西町なる大工町板挽町の方より大谷  
川の橋を踰て僅小家並のある所と云ふ是より含満  
淵又ハ鳴蟲山と廻りて瀧河原辺への通行道なり  
慈雲寺 伽羅陀山と号す中興開山ハ慈眼大師の高弟  
晃海僧正なり此辺より都て含満と稱せ

吳山勝概 卷之二 完



憾捨洲一合満 慈雲寺の西北方 北岸小 絶壁の  
 巨岩水涯より峙立を豎九尺横三間許其形勢甚奇  
 異小して鬼斧の削割をみ 異ならに頂上小 不動の  
 石像と安を其下ハ激流盤渦して淵底許り知るべし  
 らハ絶壁の平面水際の 所小 憾捨の大梵字と彫之  
 修學院五世光海僧正の點を 所なり と云ふ世俗弘  
 法の投筆といつ 空海と光海と和音迄 まで以て  
 誤り傳つ 所なり 故小 慈救咒 の下の 一句と取て かんマ  
 せり所なり 故小 慈救咒 の下の 一句と取て かんマ  
 じと名附たり と云ふ慈救咒 とハ則ち 不動の真言小

「ナウマクサマンダ 中畧 ウンタラタカニマン」と云ふ  
 下の 一句小 して梵字ハ 則ち 慈救なり  
 靈庇閣 憾捨洲の南岸ハ一面小 岩石相連り其上小 護  
 摩壇あり靈庇閣是なり圓柱の 四阿屋小 作為し幽趣  
 尤小 愛をべ 此境ハ見海僧正の 草創小 して此岸を  
 不動の 石像ハ 則ち 僧正の 造立を 所護 摩壇ハ 亦  
 同時の 建設小 係る と云ふ又西南の 丘上小 石彌陀の  
 座像七 八十軀並 列せ り各四尺許之 慈眼大師の 遺  
 弟等過去萬靈自己 菩提の 為小 建立を 所なり と此  
 石像の 前と 通り て一町許行ハ納骨塔小 至る



龍山

卷二



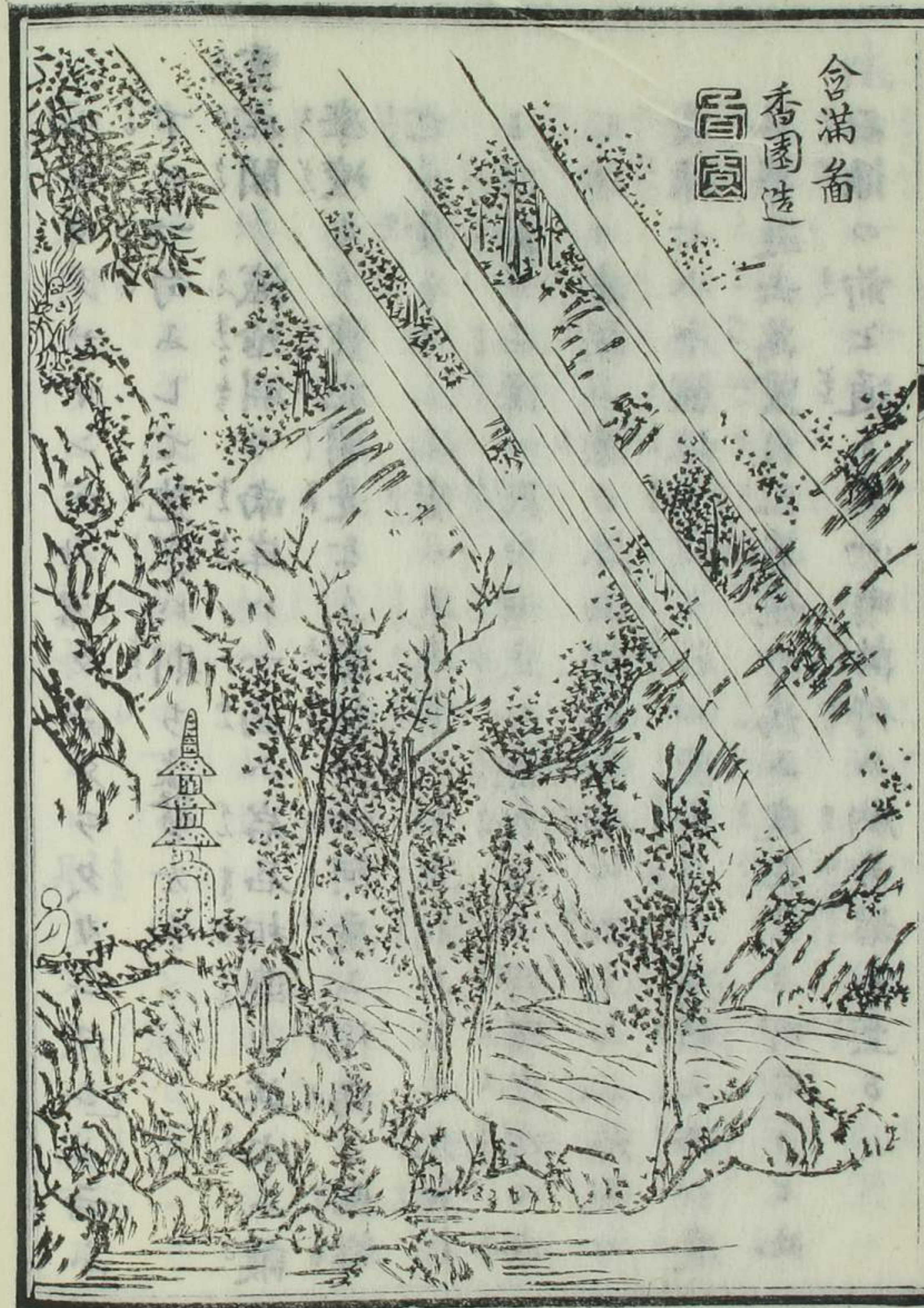
五十一



吳山

卷二

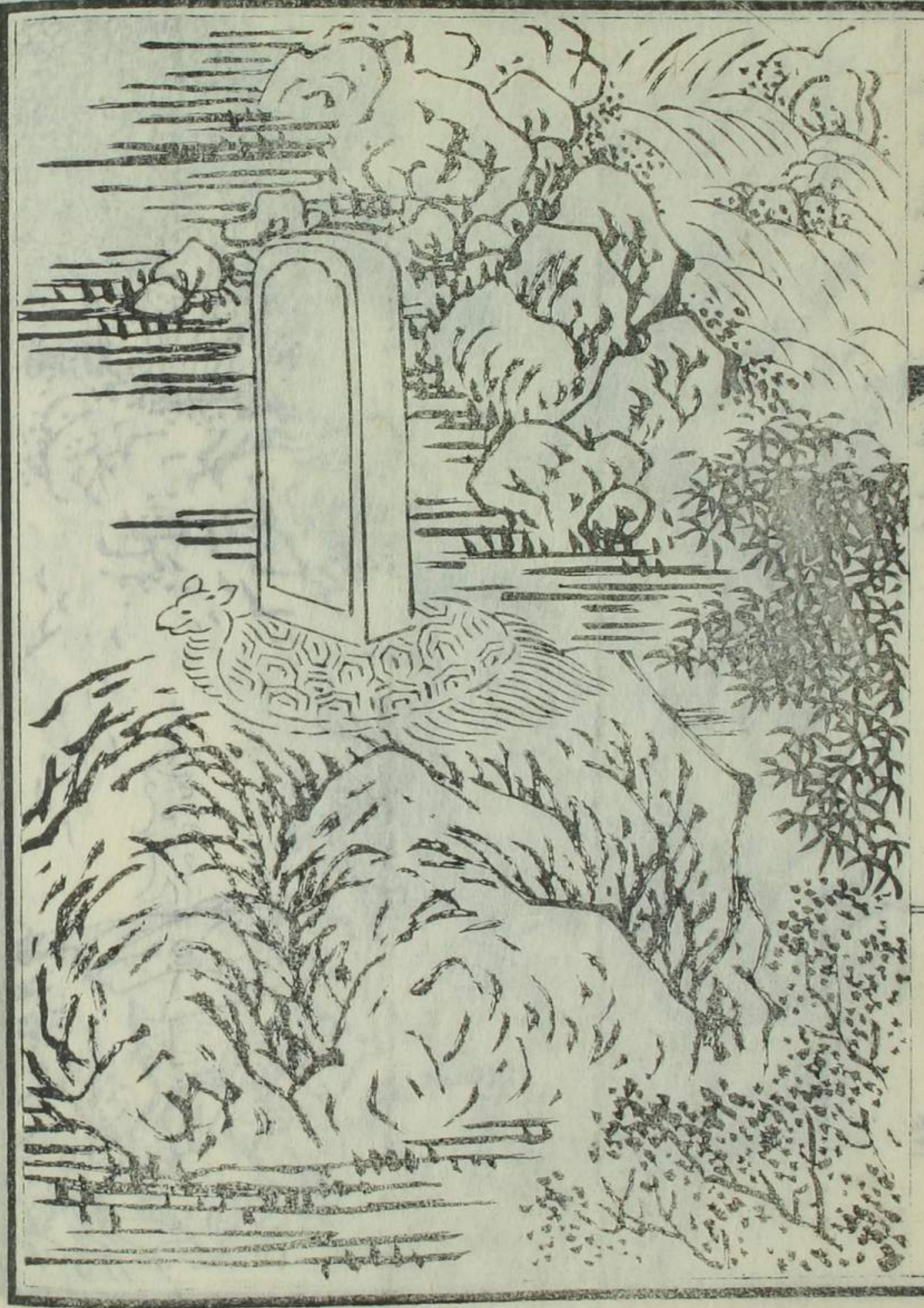
會滿齋  
香園造  
眉園



五十二



名山勝蹟  
卷之三



納骨塔

山水膏肓遂不痊  
再生欲伴小神仙  
勿憂探勝崑頭死  
納骨塔存會滿邊

本州香園野史寫并題



名山勝蹟  
卷之三



名山勝蹟 卷之二

納骨塔 憾捨の奥世塵小遠き所小あり礎石ハ突元と  
る大石よて高さ一丈許徑二間小出入七背後小穴と  
穿ちて新旧の骨と納むるやう小設けなせり其上小  
林羅山撰文の碑石と建より

憾捨淵納骨堂碑

羅山林道春撰

日光山中有淵潭世稱不動明王來現處也故採其種  
字號憾捨淵誠是勝地靈區也先是  
東照宮背後深奧之處有納骨堂慈眼大師為畏神威  
毀除之已而大師遺教曰我沒後宜再建此堂未暇相  
收漸歷數歲方今 尊敬法親王有可以營堂於憾

捨淵幽處之旨且大師之衆徒等為過去萬靈為自己  
菩提彫石地蔵若干軀造立淵畔淵畔有巨石方八尺  
許鑿開之以納新舊之骨乃立碑於此石上以記其所  
由願以此功德骨化為水精乎為寶石乎為珠玉乎與  
不動地蔵分其骨乎抑果與佛舍利相共同乎骨已如  
此則其群靈或上天或成佛以可證之乎  
法親王繼大師之志受大師之緒以為此舉以納萬骨  
不亦宜乎若夫葬枯骨則聖主之德也掩骼埋胔則孟  
春之政令也是非非今之談聊併言之而已

明曆二戊 戊年七月二日



華石町 日光の西町と通り過田母澤の橋と踰の道は

左右の人家相接する所あり則ち是なり此町の南側

小蓮華石と名附る石ある故小元蓮華石村と称せり

今猶土人等蓮華石との唱ふ

大日堂 華石町より二町程行て左の小坂と降まの幽

静なる一境地あり此所小堂ありて石像の大日如

来と安置を傍一字の寮と設く中庭小方五六間の

池あり冷泉常小池中より涌出して頗る清潔なり先

輩記ありて云ふ水極澄徹堂倒映之恍如仙境也と

能実況と盡しとる者と謂べし此地ハ含満の上流小

して風致亦含満小讓らに池辺小芭蕉翁の碑あり

あなやしのとまゝ茶を茶のりの定了

久次良村 華石町の西北小方より村落あり家數僅小

十二三戸皆山麓に散在せり東ハ御堂山に堺し西ハ

清瀧村に接し東西凡七一里餘町此村ハ小部落を造

とる日光草創の舊地と聞けり

若子道 神橋より境内迄一里と云ふ其順路ハ西町と

通り過釋迦堂の脇より北へ折れて爪上り小八九町

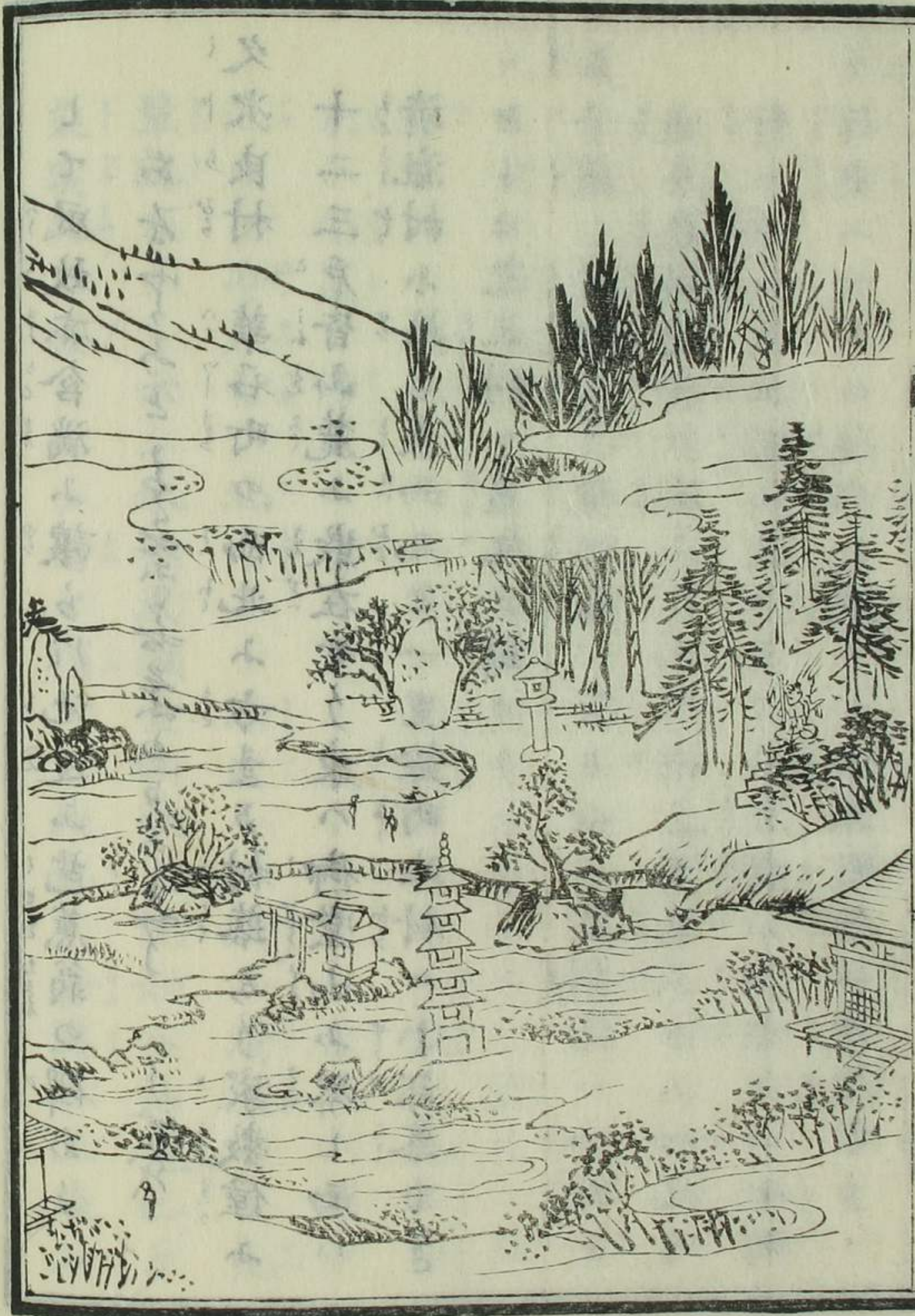
行ハ池石と云ふ所に至り夫より直線小平原と六七町

行更ふ一二の溪水と渡りて四五町行ハ境内なり



大口堂圖

吉山





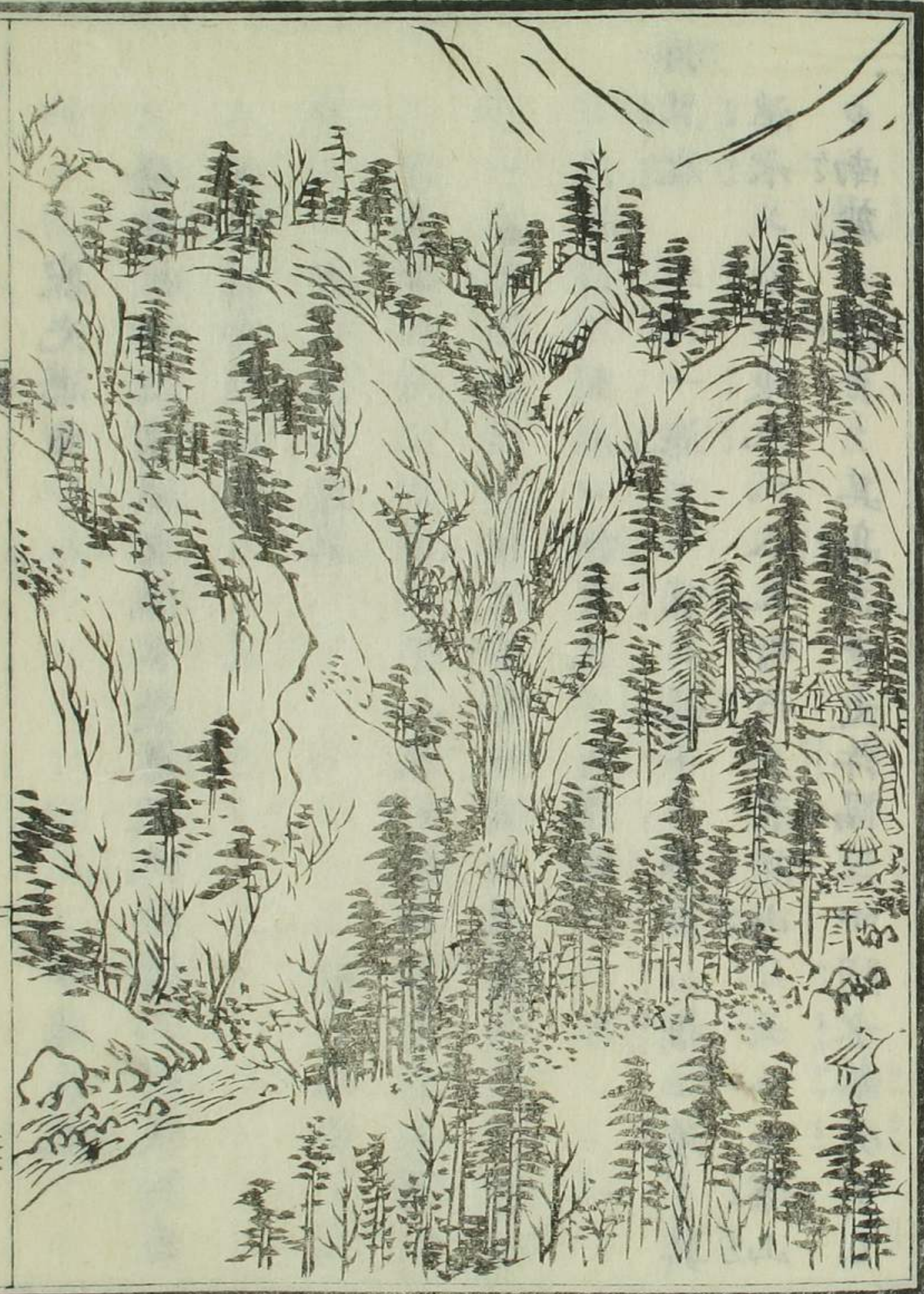
池石 若子道左の路傍ふあり大さ五六尋高さ五尺餘  
上ハ稍平滑ふして凹なる所三尺ふ四尺深さ一尺許  
常小水と貯へて旱天と雖も渴せし事なし故に生石  
と云ふ称せり此辺の小名と池石と唱ふるに此石何ふ  
小因ふと云ふ

二水杉 池石より六七町先ふあり周回二丈餘稀有の  
大木なり此杉ハ元寂光の遠門と称し道と狹くて二  
本有しと先年大風の為ふ一本倒れと云へり  
若子神社 祭神下 弘法大師の勸請なり此境ハ有名の  
舊跡ふして本社拜殿ハ勿論大師の開基寂光寺及び

常念佛堂 求聞持堂 不動堂 其他諸堂立並びて頗る壯  
嚴なりしに明治維新以来二荒山の司掌ふ歸し後十  
年三月回祿ふ罹り悉く焼亡して荒蕪ふ属せり惜哉  
此靈場探勝の人誰う大息せざる者あらんや  
寂光瀧 一名布引 若子社の西北ふ懸まり世又七瀧と  
称するに誤りなり飛泉の高さ十七八丈幅二三間此  
瀧の岩石ハ段々階級と為るがゆゑふ飛泉も亦階級  
ふ從て奔流し宛ら布と引ふ異ならぬ幽趣殊更ふ  
雅人の腸と腦まて先輩此瀧と以て日光八景の一と  
為る亦撰り得て妙なり



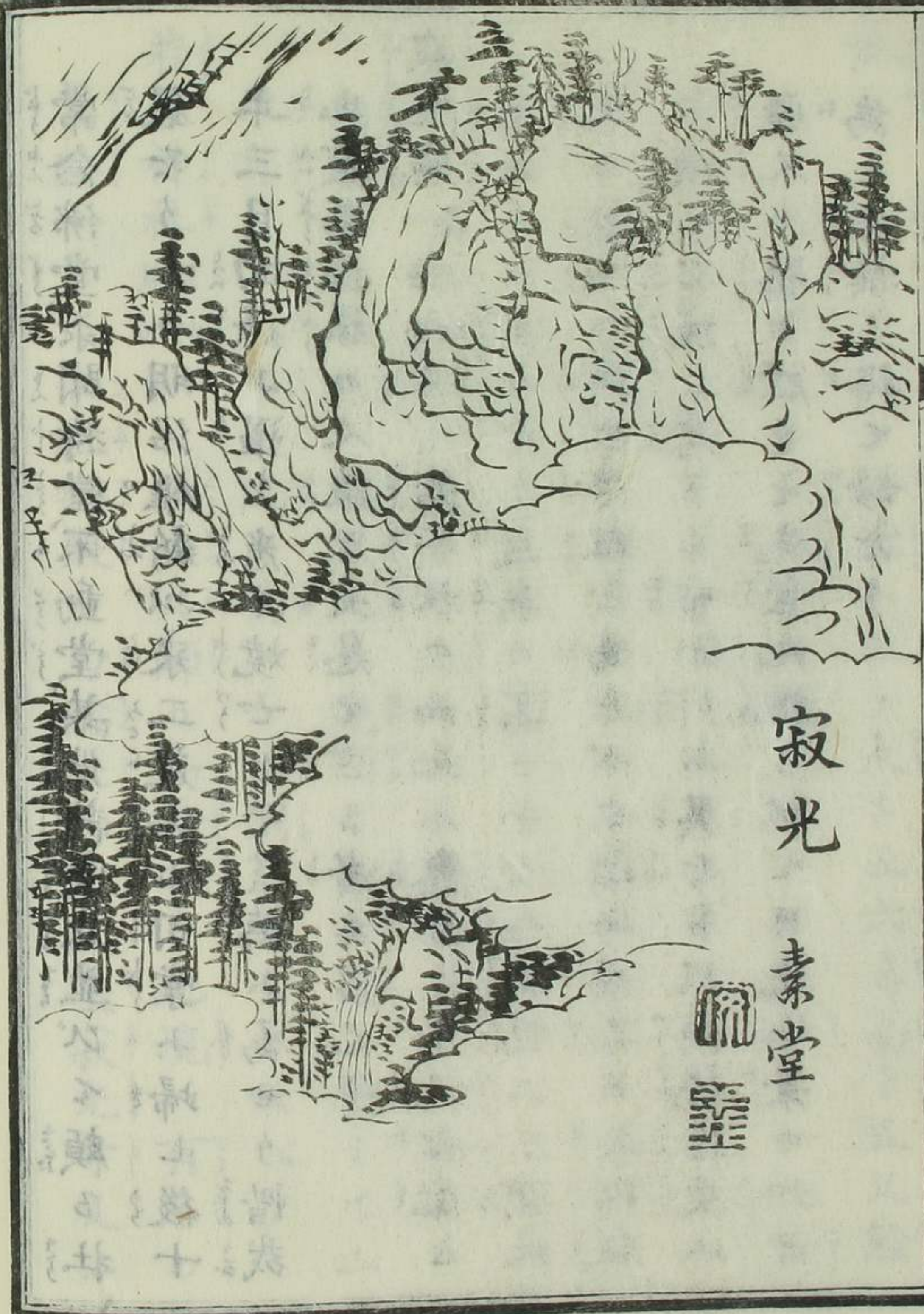
龍山  
勝概



五七

昇山  
勝概

卷之三



寂光

素堂



寂光  
素堂  
畫



寂光瀑布

伊藤長胤

峰尖松暗白雲迷雪瀑半巖懸欲低料識山僧長對看  
不知霑却黑迎黎

述寂光寺觀瀑

林 春齋

偶尋古跡寂光寺瀑布穿石流不停百尺天然長帶白  
一條界破茂松青奔泉餘馬似噴玉飛沫濺花如建瓶  
試掬餘波閑漱口旅愁洗了自清冷

羽黑瀧

土人一瀧と小唱ふ若子入口の石橋を渡り其  
溪水沿て東北へ八九町行ハ羽黒山と云へる深山  
の南麓ハ懸き其高さ十丈許幅三四間水勢大よし

て壯觀なり然まとも定まりとる道もなく荆棘と分  
ち溪流と渉りて行所をせハ遊覽又稀なりといふ

相生瀧

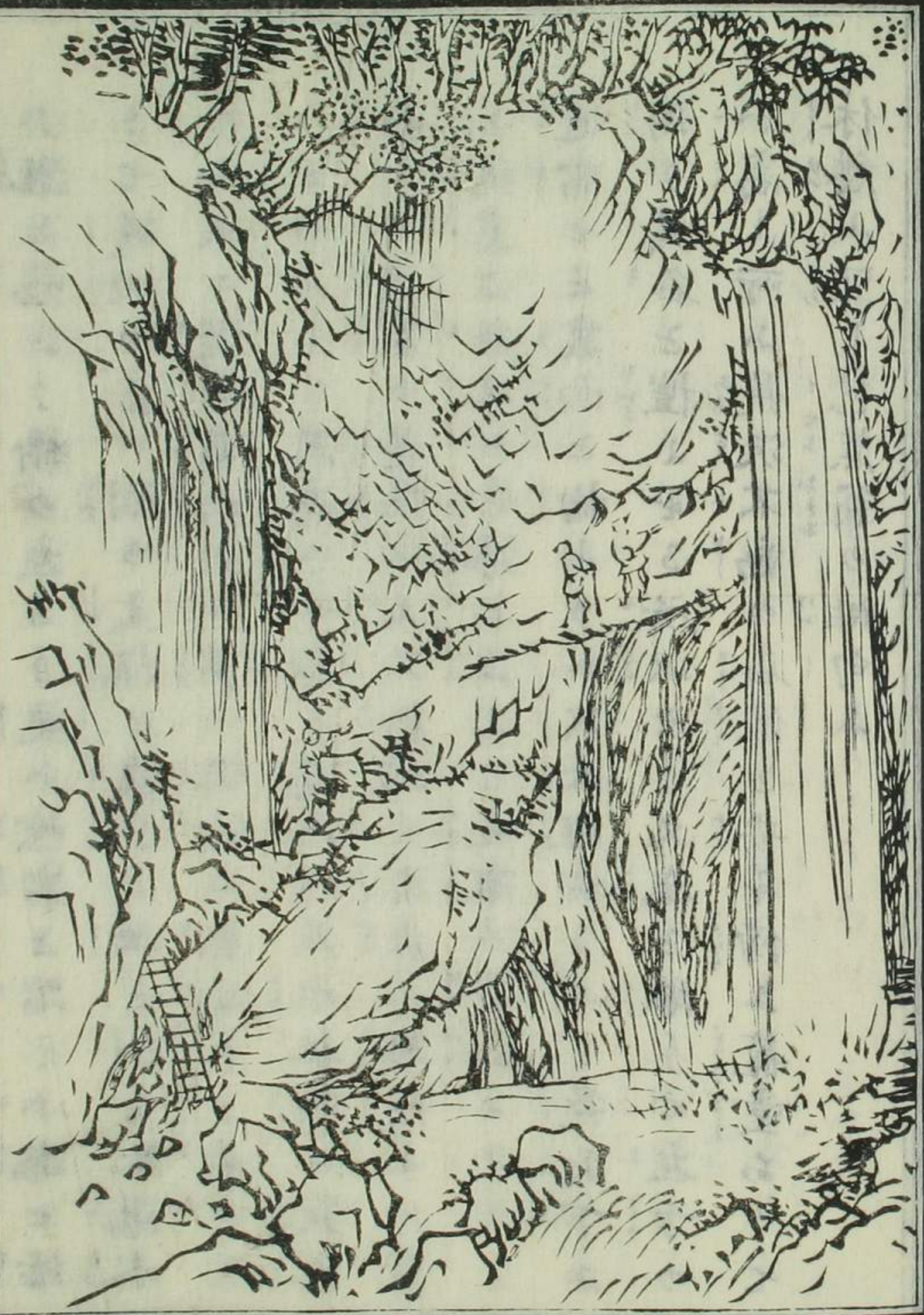
若子の東倉下山ハ懸き其道ハ池石より數  
歩みして右へハ小道あり夫より溪流ハ遡りて五六  
町行ハネブカ山ハ至る此山の石ハ斧鑿と用て割裂  
せよ又ハハ自ら片々として切石の如く故ハ一の  
錢杆と以て容易ハ堀取事を得べし若子ネブカと称  
せよ水の是なり是より奥ハ樵夫の道とハあること  
なく溪水を踏て三町許行ハ瀧の下ハ達を瀧ハ二箇  
所ハ懸き一ハ雌瀧とし一ハ雄瀧とハ故ハ相生の



瀧と名附しとりや雌瀧ハ西に向ふ其高さ十二三文  
幅五六間水少なけきとも風姿愛せべし雄瀧ハ南小  
向ふ高さ八九丈幅七八間水勢盛ふして壯觀なり此  
瀧ハ他の瀑布と異なり頂上の水ハ圓形の岩と抱て  
落来り次第小直下せる岩面を奔流し泡沫飛散して  
四辺を霏せ何ぞ帝霧降の容衣と濕をのこならんや  
炭う小聞く往古白糸の瀧と稱せしハ此所なりと宜  
なる哉流派の中小縷々たるあり織々たるありて宛  
くら白糸と亂れ小異ならん斯の如き名瀑布にして  
未と人の耳目小入ざらぬ遺憾といふハ餘あり編者

幸小先鞭を著く遊覽の人寸歩の勞を辭せ此此瀑水  
と掬して探勝の奇と博せん事と企望せ  
裏見瀧 久次良村部内荒沢の山中小懸まり華石町と  
過二三町の處小御嶽山登拜道と記せる榜示と建り  
夫より右へ十七八町行ハ荒沢の一茶亭小達せこの  
茶亭より道と左小取り崎嶇より逕路と躋せハ溪水  
を隔ち、一瀑と懸く此瀧ハ岩石突起せる間と奔流  
して離合せり事細の如し土俗之と裏見の索麴瀧と  
稱せ更小進て左へ降まハ溪流小架せり水橋あり此  
橋上より望觀せむハ主瀧ハ正面小懸り左右小亦

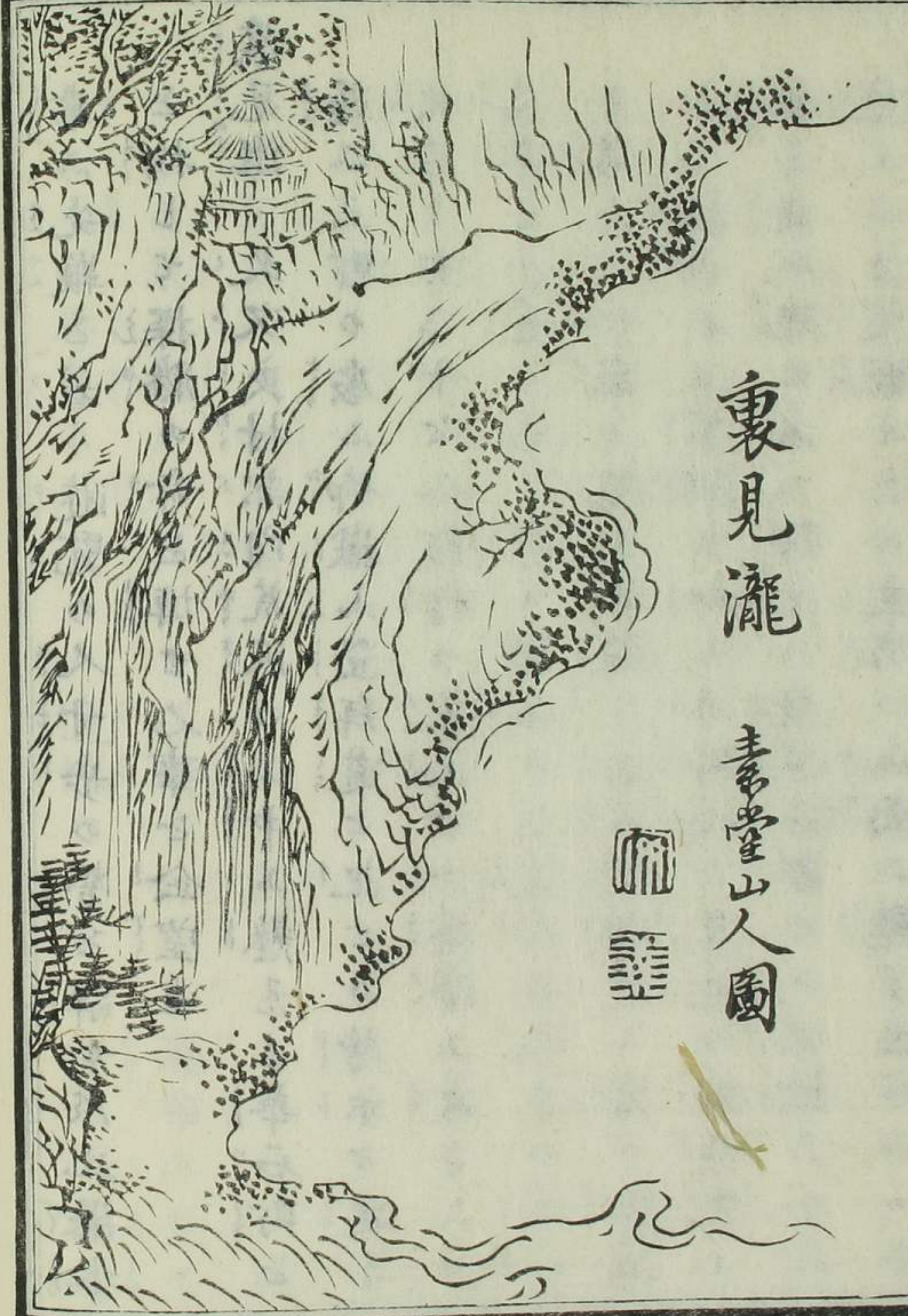




龍山  
勢既

卷之二

六

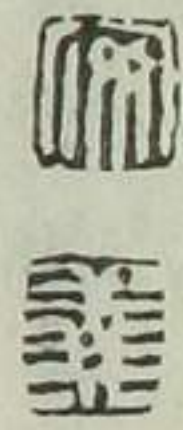


龍山  
勢既

卷之二

裏見瀧

素堂山人圖





小瀧と懸より橋の左より更ふ嶮岩と踏み小瀧と涉りて迂回せむべし則ち主瀧の裏面と掬せむべし此瀑水の山上の盤岩突出せる事一間餘の鼻端より飛下る水のふして其高さ十餘丈幅五六尺水勢頗る盛也而して其裏の道幅ハ五尺許以て自在に潜行せむ事と得真に無比の奇瀑と云べし夫瀧ハ表面と見ると通常と其裏面と掬せむべし只此瀧あるのこ是天下の獨り其名と擅せむる所以なり又瀧と潜りて左方の小高き所ふ荒沢不動の石像と安ん傍に籠堂ありて休憩ふ宜し芭蕉翁の俳句ふ

夢時々遊り著る如く夏のそよめ 壬戌

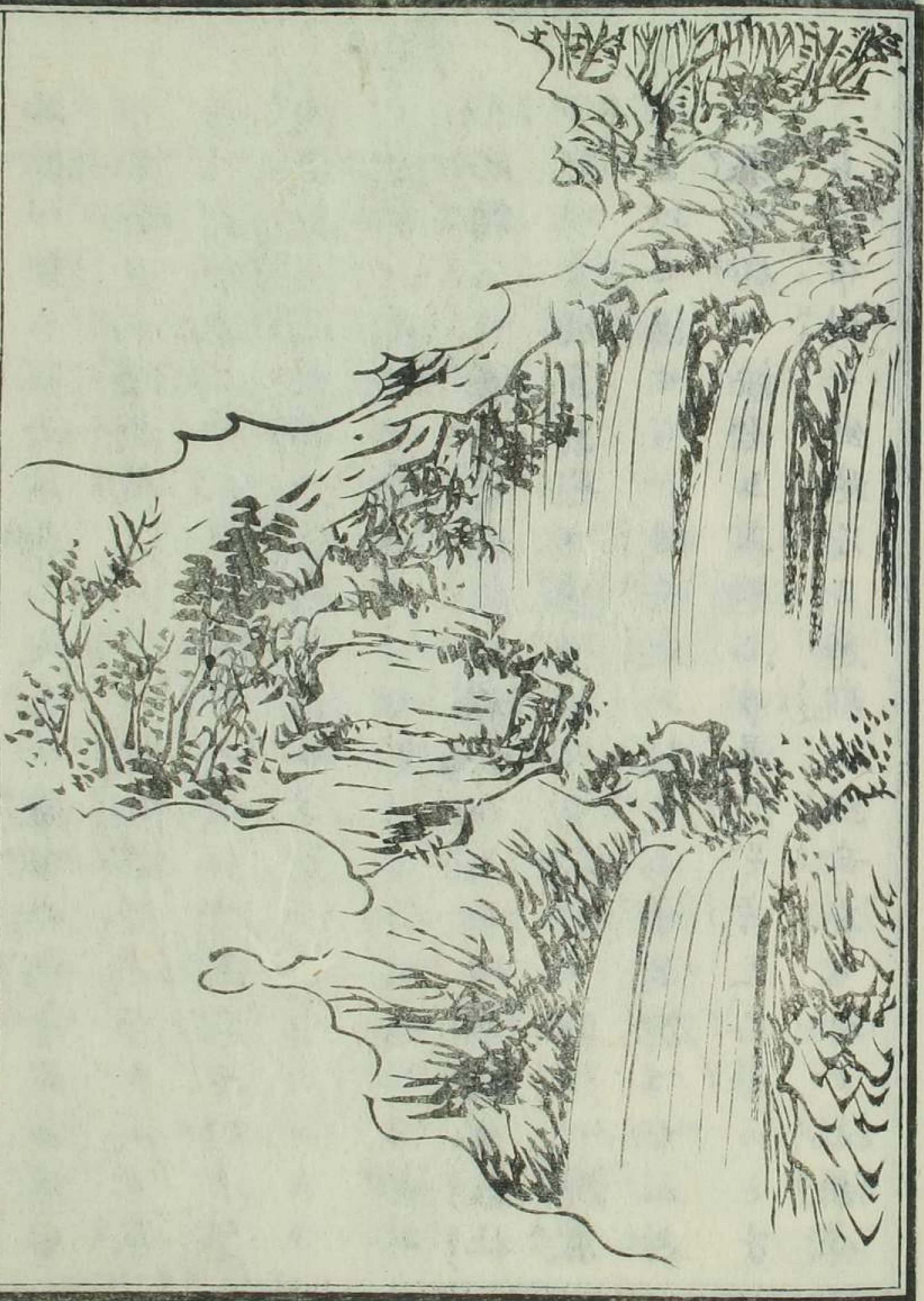
慈観瀧 裏見瀧の上流なり荒沢の茶屋より志津道と大町をうり行て右へ分る爪上り又十二三町登り又右へ二三町下せし瀧の辺に至る瀧の上ハ一大平石斜面を爲し其幅十五六間長さ五六十間而して瀧の落口ハ屋簷の如く突出て、出入るし瀑水ハ上の平石を流す来り鼻端の凹所より數派に分きて飛下る其水湊りて小潭となし更ふ又二派に分きて懸崖と下る事三丈餘り奇中小幽趣と具へて名状する所を知らば此瀧ハ慈観僧正の發見に係ると以て瀧の名



龍山勝概

卷之二

全



龍山勝概

卷之二



總觀瀑

素堂畫



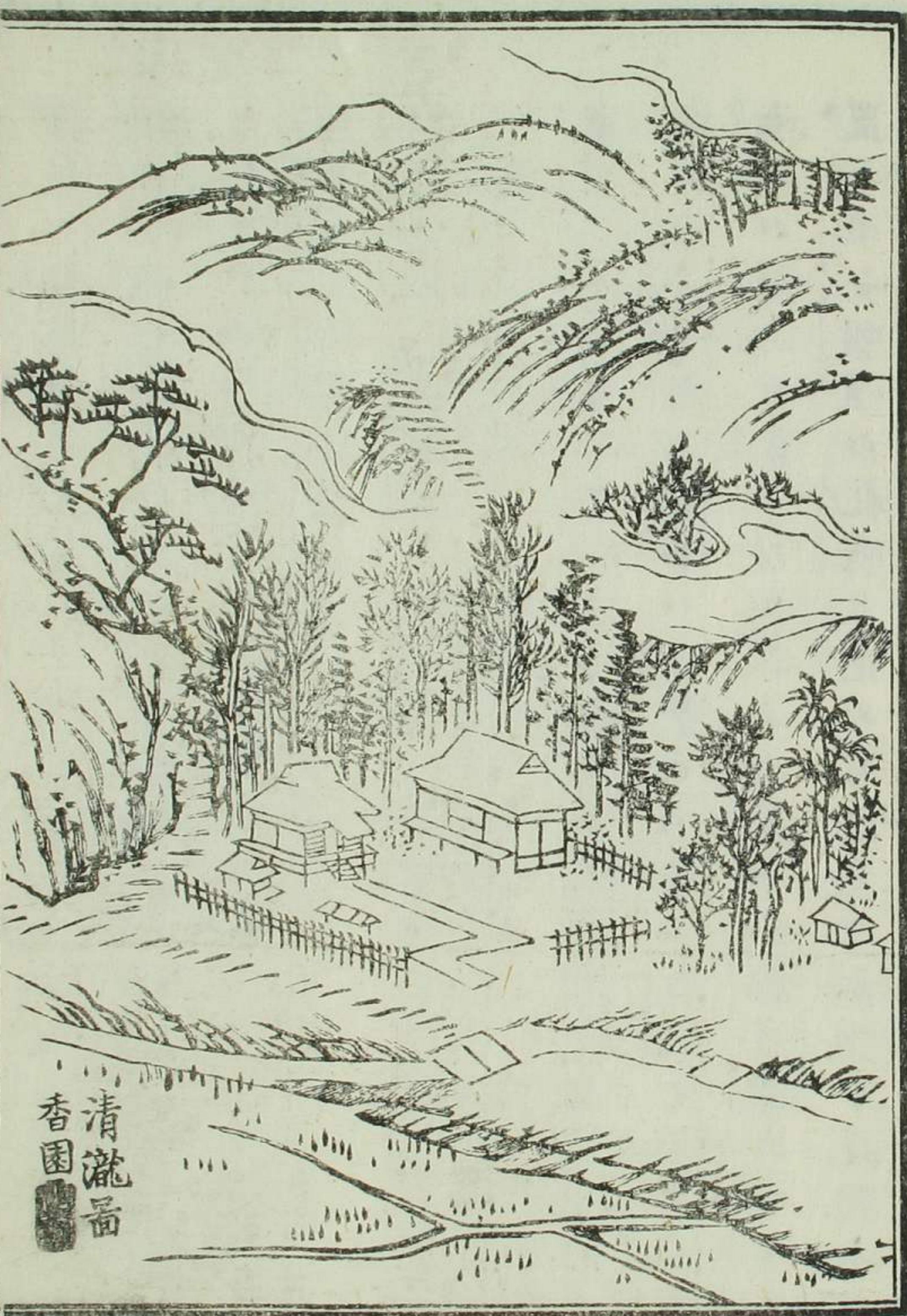


小負へせりと云ふ都て此地ハ瀑布の幽奇あるのこ  
をらに東南開瀾故小遠近の風光坐をがらみして尽  
るべく又後山の紅葉ハ旭日に映して画くみ似たり  
誠是晃山瀑布中の勝地と云ふべし  
編者云晃山の瀑傳て七十有二と云ふ而して世小  
所謂三大瀑ハ華嚴裏見霧降の三とハ華嚴ハ雄壯  
と以て現見裏見ハ奇峭と以て名あり霧降ハ綺麗  
を以て稱せらる後人更ハ龍頭湯瀑を加つて五名  
瀑と為を按ぢらみ晃山の瀑何ぞ當五名瀑のこな  
らん布引の幽邃なる慈觀の幽奇なる却て五瀑の

上小出り所無小あらに故小又此二瀑を加へ七大瀑  
と為て以て博雅の高評と待つ  
清瀧村 神橋より一里餘村の入口と鳥居原と云ふ中  
宮祠及足尾辺への往還小して民家僅小三十戸許り  
併し酒食と商ふ家ありて旅人の休泊小差支をなし  
清瀧神社 清瀧村往來の山際小あり弘法大師の勸請  
ふして天竺大鷲山の金毘羅大權現と祀まらむものと  
云ふ往時本社の後小方り老杉茂り峻岩聳えたる所  
小清瀧と名附る瀑布有りしり近來代水せしより其  
水潤て僅小滴りと殘るのこ古來樹木と以て水源と



香園



清瀧  
香園

李

吳山勝概

卷之二



李



語あり今其実を見る

清龍寺 村内往還の北ふあり勝福山金剛成就院と号

モ私法大師の開基にして真言の道場なりしり慈覺

大師登山以来台宗と唱へしと云ふ

清瀧觀音堂 清龍寺の西又方る路傍ふあり堂ハ六間

四面本尊ハ勝道上人手刻の千手大士なり是ハ中禪

寺の千手觀音と刻とる餘木と以て作為せる物と

云ふ元中禪寺の觀音ハ坂東十八番の札所なりと云

女人の登山と禁しとるふより爰ハ同躰の觀音と安

置して女順禮の札所と定めらましと云へり此別所

ハ長興山福聚院圓通寺と号モ本堂ハ相並べり是よ

り右ハ折きて行ハ中宮祠ハ至り左ハ足尾道なり

馬返 細尾村の部内ふして神橋より一里三十町と云

往時此所より馬と返しとて以て名附く戸數七八軒

内茶店三四戸ありて休泊共ハ差支なし且山間とい

いハと其風俗野鄙の朴訥ハあらハ二荒登山の道

俗ハ必ハ此所ハ休憩モ常トモ

前二荒山 馬返より五六町行て右方と仰き見まハ數

百仞の嶮山對峙して男躰と女躰との如し故ハ前二

荒又ハ小二荒とモ稱せり其峭壁ハ洞穴あり遙クハ



龍山  
卷之二



六天

昇山  
卷之二

卷之二

馬返畜  
香園画





之と望めり豎二三丈横八九尺許小して深淺固より  
知るべからん縁起と按ずる小當山小大坑穴あり春  
秋兩度必に大風吹出して草木と倒し民屋と破却と  
弘法大師登山の時之と辟除結界して災と拂ふ云云  
とあるに此洞穴の事にて有るなるべし

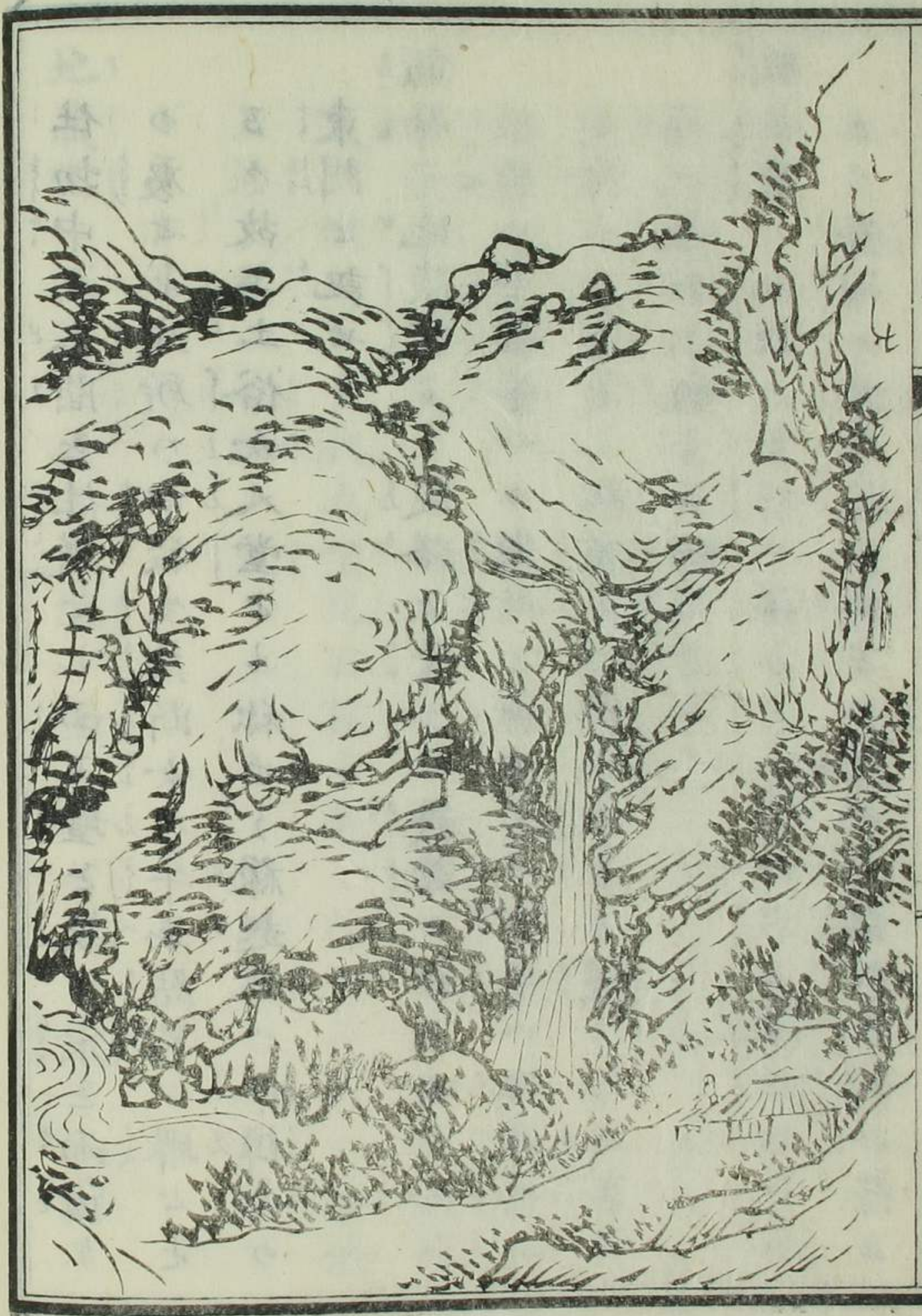
深澤茶屋 馬返より爪上りなる河原と歩むに怪岩  
道小横より激流雪花と飛を漸く行て二三の溪橋  
と渉り更小險路小登らんとせり所小設く酒食庵な  
るも亦勞と慰むべし  
地藏堂 深沢茶屋より僅小登る所小あり堂ハ三區小

仕切中の上間と往還とし西小壇と設け東と雨宿り  
の處とを此所ハ旧殺生禁断女人牛馬結界の堺とを  
るも故小土俗女人堂と稱せり縁起ハ中禪寺の  
東門と記せり

劔峰 地藏堂より坂路と登りて棧道のあり所と云ふ  
往時ハ登攀第一の難所と稱せし方今ハ輿馬共小  
支障あり事をし此處ハ亦一茶亭と設けて遊客を  
待つ瀑布と觀るの好憩臺なり  
般若龐 劔峰の左右ハ深谷小して四方ハ峻山をびえ  
と峰頭小立て遙小北方と望めハ谿谷の間小懸る



異山勝概  
卷之二



方等  
般若  
瀑布



甲申  
冬日  
素堂  
義寫



龍山勝概  
卷之二

矣



水の一般の瀧なり其高さ五六丈幅三四尺此瀧の  
水は少なけしとも直下に至る瀧の裏と自在に潜  
行せる事を得るなり故に評して小裏見と云ふ

方等瀧 般若瀧の西南に懸る飛泉の高さ八九丈幅  
二三間般若比をまゝ水勢遠く盛なり此瀑布の名  
は縁起より出ると云ふ

中茶屋 劔峰と大平との中腹にあり一憩して東南と  
望めは微く小阿巖瀧と見ゆ中庭に巨石あり土俗傳  
て磁石石と云ふ此茶屋より上と不動坂と称して中  
宮祠第一の峻坂なり

大平 不動坂と登り詰てより中宮祠へ至りまて平坦  
なる所と云ふ路傍に古木枝と雑へ其梢に葉も無  
き藻草の如くなる物と懸く方俗サルヲカセと唱ふ  
是より深山に入る所にして之の所らざるはなし

華嚴瀧 古へ江尻瀧と稱す 大平の中程の左に從是華嚴瀧  
道と記せる石標を建てり夫より左に折きて三町許  
行ハ瀧の辺に至る此所一字の茶亭あり各處に腰  
架と設けて休憩し便を其前小巨大なる長篇の碑石  
あり小野湖山に撰むる屢ふして字々嶢嶢惜我題字  
と誤る都て此辺の側面より瀧の上部を眺むるのこ

と誤る都て此辺の側面より瀧の上部を眺むるのこ





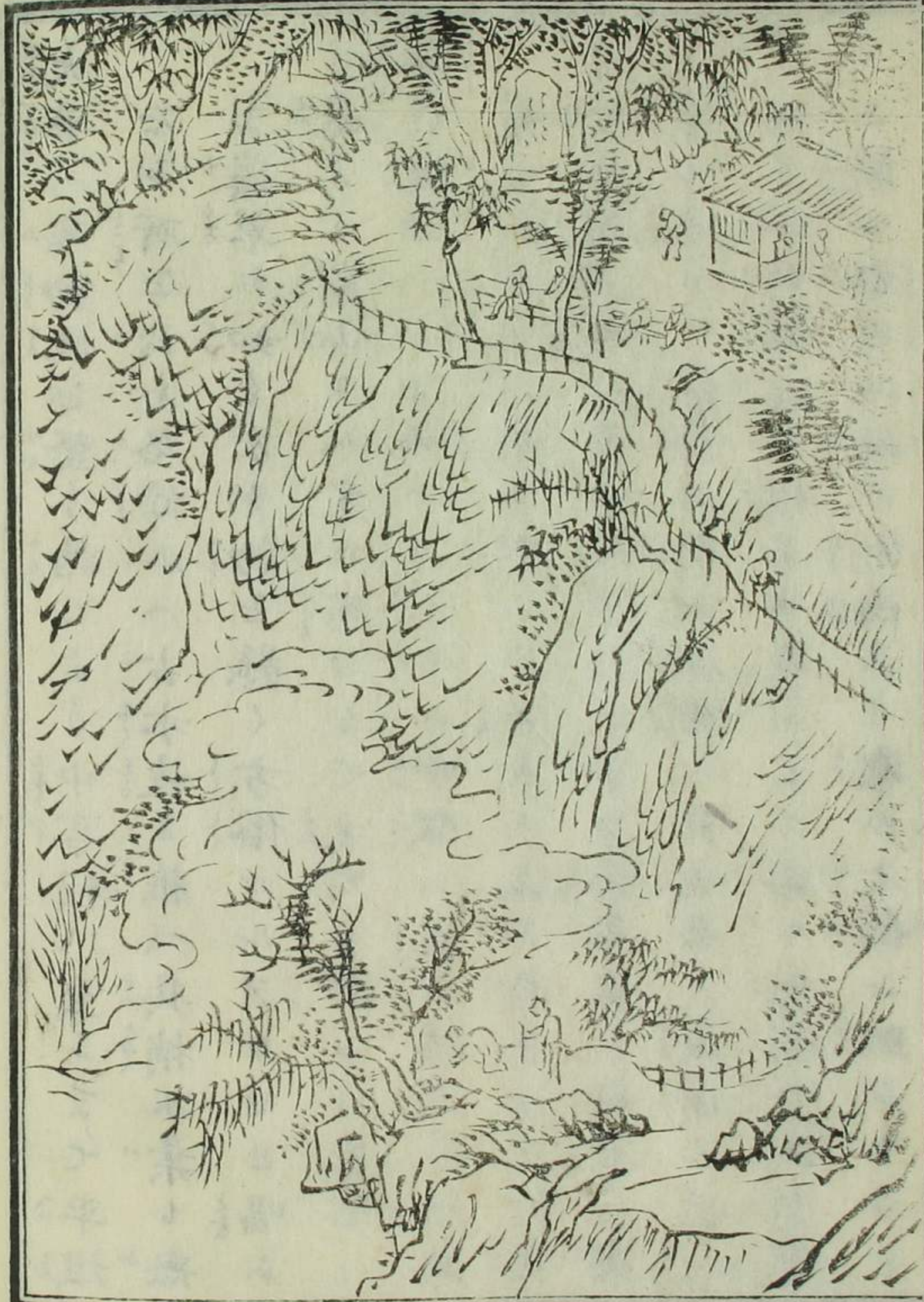
萃巖瀑布

畫堂寫



翠山樓

萃



翠山樓

卷之二



因て茶亭の南なる岨道と一町半許降りて西小向へ  
ハ瀧の全躰を望観をべし此瀑布ハ中宮祠の湖より  
落来りて一條の水路を為し五六町東流して瀧口小  
至る瀧の形状ハ數百仞の絶岩砥の如く北岸より南  
山小連なり大半下りて鋸齒状と為し以下ハ灣窟し  
て現ふべからば瀑布ハ絶岩の中央と飛下し轟々と  
して潭底を打つ其幅三四間高さ七十餘丈関東第一  
の瀑布と稱は是大谷川の水源なり此瀧ハ古人既小  
賞揚して詩歌小咏し圖小寫して普く人の知る  
所なるハ編者の喋々と要せに只其槩畧と掲るのこ

蓋し華嚴と名附る所以ハ縁起小此山中有瀑則湖水  
流派青巒高從紅日早照清瀧近遠岩上繁花芬々恰如  
涵錦似巖瀧因名華嚴瀑云云此瀑あり故小又深沢  
小方等般若等の瀑名も起るなりべし又此溪間小  
岩燕と云もの數萬飛翔して目と遮る大さ鳩より小  
小さく燕小似と云と尾ハ裂け只尾先小針の如  
きものを見る  
華嚴寺旧跡 聿湖より華嚴瀧山流る水路の北辺小  
あり旧記小空海和尚江尻小華嚴精舎と建つ云云と  
載より退轉の年代考ふべからば此辺を過て中宮祠

龍山集 卷之六 主



社務所へ至る迄小巫女石牛石杯といへる石あり

中宮祠入口 神橋より三里十二町と云ふ入口小冠木

門と設く傍小婦女登山の規則等と揭示せり

二荒山登拜小屋 元禪頂小 冠木門の内より建連板多

くハ二階造ふ七惣敷丈五棟有大抵一棟丈間より丈

五六間小至る左ハ湖辺ハ二棟口ハ數棟接續して尽

る所ハ賄小屋あり方十二三間其脇ハ徑三尺むかり

の大釜十六楮置り此他所々ハ小屋と建並べ番号と

附して登拜人と區別と故ハ中宮祠境内此小屋ふて

埋むと云ふハ可なり年々八月一日より七日の朝ハ

至る迄日々數千ハ登山し此小屋ハ籠り精進沐浴し

て後登拜と云ふ

中宮祠社務所 賄小屋ハ咫尺旧中禪寺別所と云ふ

ハの是をう此所ハ勝道上人の基を開うとる旧跡

みて補陀洛山神宮寺と号せら一字の趾をうと古記

ハ建神官精舎號中禪寺云云とあるハ中禪寺の稱号

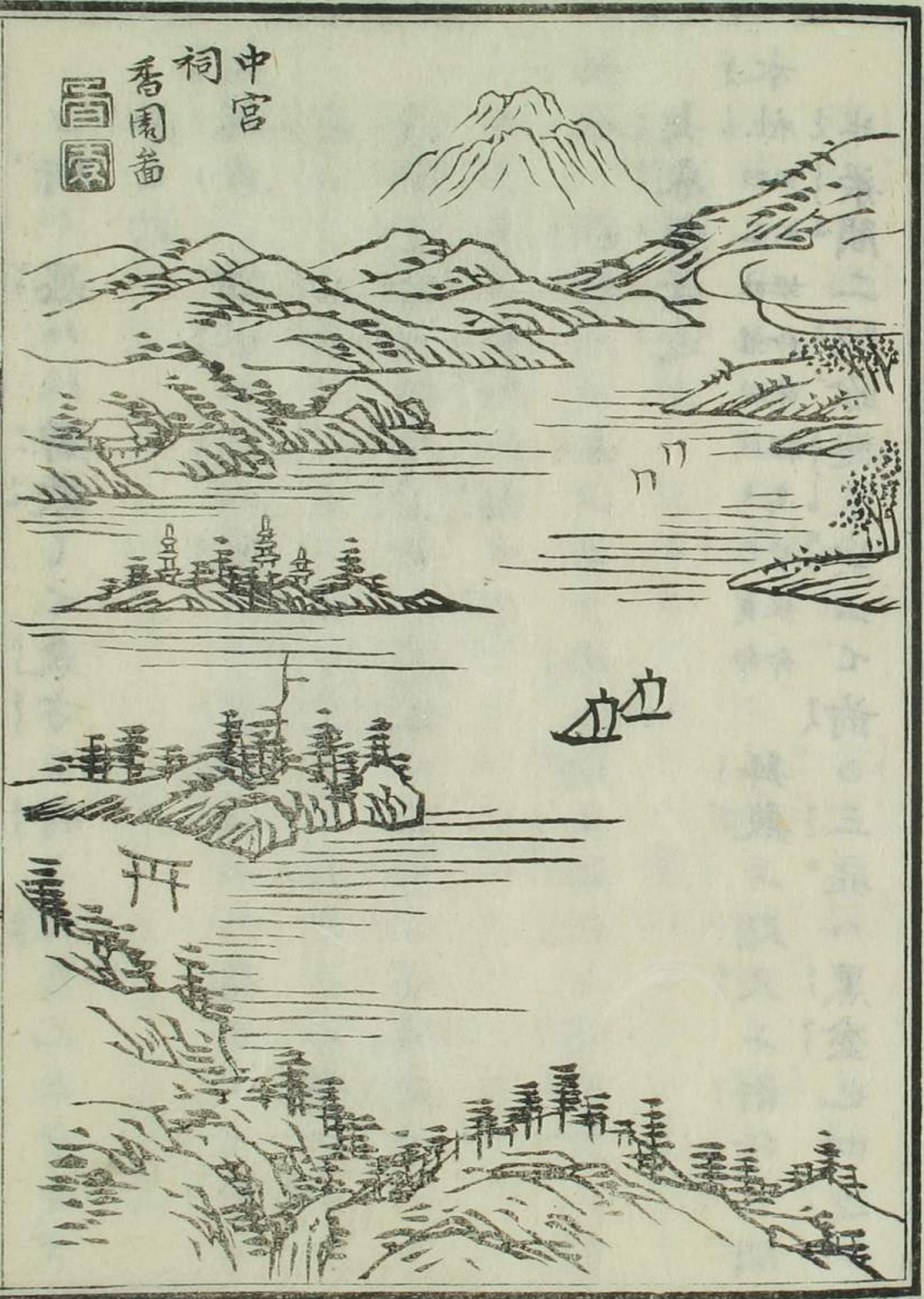
ハ其時より起るをるべし此地ハ後ハ二荒の大山

と負ハ前ハ幸の大湖と抱く旅舎茶亭湖ハ沿て簷を

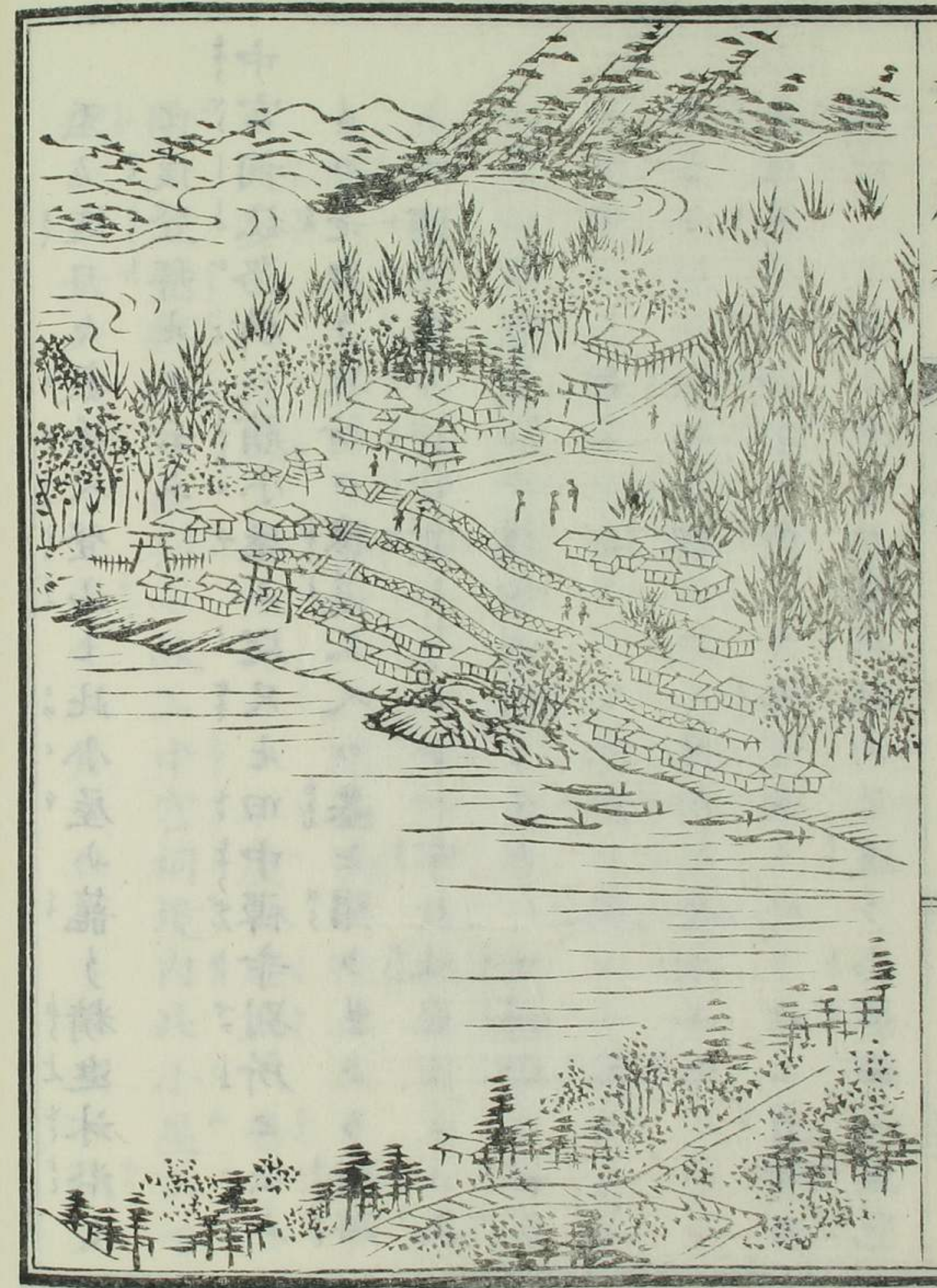
連板其亭席湖面ハ對して眺望云々ありをし月明の

夜坐して杯と舉ぎハ常蛾湖曲と遠り山影倒ハ波底





中宮  
祠  
香園  
菴





と衝く思ハに鯨飲して東方の將小白なんとせりと  
知らに

大鳥居 湖水の汀小建てり唐銅製よて高さ二丈許り

爰より石階と登まハ觀音堂の正面なり石階の西小

護摩堂採燈護摩堂あり其後小鐘樓三層塔建並びて

あり共小廢物小属せり

拜殿 社務所の西小あり南小面を桁行七間梁間五間

大床舞臺造り

本社 旧三社権現則大已貴命 拜殿小咫尺小桁行三間

半梁間二間餘總朱塗よて前の三扉ハ黒塗也四辺小

瑞籬と廻らし正面及東方小中門と設けより弘仁七

年勝道上人二荒の頂上よて三神の影向と拜し下山

の時麓小社殿と造立せと何らハ當社なりと是則ち

三社鎮座の草創と云ふ

立木觀音堂 旧本地觀 拜殿の西小並ぶ七間四面をり

本尊ハ勝道上人手刻の千手大士素木の立像小して

其丈一丈六尺左右小四天王の像と安を坂東十八

番の札所なり又觀音の詠歌とて扁額小題して

中禰多登りてとらふらふの奇のたまふ立にあら彼

補陀洛やのやうにさうふ湖のまよふ立木のちる久しと



妙見堂 觀音堂の西南隅あり弘法大師瀧尾ふ於て

修法の時池中より一大白玉と現は是妙見尊星也と

後冥勅と奉して爰小祀せりと云ふ

唐銅鳥居 本社の東方二荒山の登り口あり二荒山

神社の題額と掲ぐ

木戸門 唐銅鳥居の少し奥あり登拜の門也登拜者

の外ハ入事と許され

武射祭 毎年一月四日武射祭の神事とて神宮登山し

湖水の辺に於て其式と行ふ日光町又ハ近村の者ハ

登山し鑄矢と放ちける時參詣の老若一同小聲と發

せり是上古よりの祭儀なりと云ふ

船禪頂 陰曆六月朔日ハ開き同月十一日より十九日

まで定船講中と稱せり者連日船と漕出して巡拜せ

るなり是と船禪頂と云ふ又七月中迄願ふ者ありハ

船と出せ是と補陀洛船と唱ふ

二荒山 補陀洛山黒髮山日光山 木戸門より絶頂まで

三里と云ふ下野第一の高山を登ると昇降小格別危

険なる所なく又道の尋ね難き所もなく女貌山太

郎嶽等の険小比を登り却て攀ち易きと覺ふ頂上ハ

南北六七町東西二三町爰小銅板よて包めり社壇と

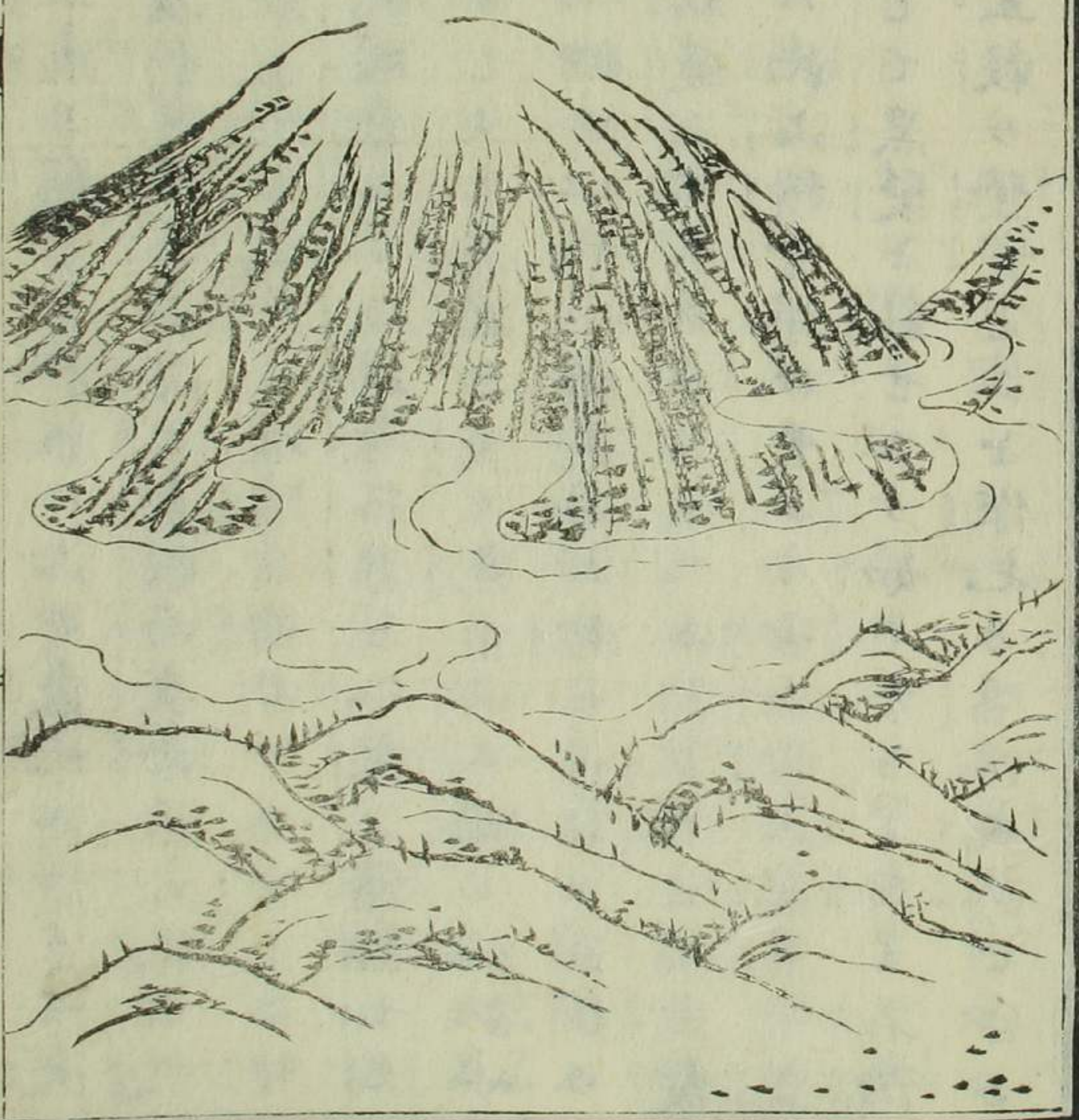


鎮山方九尺許東面せり是二荒山神社の奥社なり  
社壇より東北一町餘の所の平坦にして其詰り小對  
面石と云ふあり勝道上人の神影と拜せし所と云ふ  
夫より五六間登る此山の最極なり又社壇より西  
方三町許の所小太郎の神社あり都て此山巔より望  
めハ富嶽南方小峙ち赤城筑波其他の諸峰ハ眼下小  
屹立し山間の湖沼ハ恰も盆の如く而して満山老樹  
鬱生して四時榮枯の變ある事なし然れども頂上の  
樹木ハ風雪ハ罷せられ自ら縮小して却て風景と遮  
るものなく屬目自在其神秀なる小至りてハ言語の

能く盡す所ニあらば登攀して後其妙と究むべき也  
相傳ふ今と距る事一千百有餘年神護景雲の昔勝道  
上人初て跋渉と企しハ路嶮小雪深く雷吼振動して  
登ると得以後十五年と經て天應元年四月先志と起  
して又企登らんとを遂と果さば二年三月大誓と  
發し經と寫し佛と圖し勤行を事一七日且曰這回  
山頂小到らばハ亦菩提小到らばと誓ひ畢りて遂小  
頂上小達せると得たりとを此時上人神祠と崇めし  
ハ天地の神明と祀せりなり後弘仁七年登山のとき  
神影と拜してより日光三社の神と崇祀と云へり



男婦



男體女貌





備此山と二荒と稱せり所以ハ山の東北に方りて大  
 坑穴あり羅刹窟と号せ毎年春秋兩度必に大風と吹  
 起して草木を倒し民屋を破壊を因てフタアラと呼  
 ると弘法大師登山の砌辟除結界し二荒と轉語して  
 日光と改めしより暴風の災を免せしと云ふ按るに  
 荒ハ大也と有ハ二つの補陀洛と稱せりハフタラの  
 大山と云ふ義なるべし補陀洛と稱せりハフタラの  
 フと五音相通してホタラと云へるなるべし又黒髪  
 と唱ふるハ此山積雪深けきと古水常小碧翠と重  
 衣朦朧として黒髪と亂せり如くなるも因て名附  
 とりと又五穀の登實とせと作毛と唱へ成熟せざる

を不毛と云ふ如く當國ハ神代より高山ハ樹木の  
 成立しけるより毛の國の名ル起れりやさきは此  
 山ハ樹木の茂るゆゑ毛の山の心よて黒髪と呼ぶ  
 と云へり備亦我國の名山ハ必に男髯女髯の稱  
 号あらざるハなし此山ハ例ハ做へ二高峰と陰陽ハ  
 配して男髯女髯と云へるなるべし此二髯より大真  
 子小真子太郎等の号ハ生ぜしならん蓋し男髯女髯  
 の稱ハ和歌杯ハ見へざるハ古き唱へよてハなき  
 ルのと見ゆ保し世人多くハ男髯山と唱ふ  
續古今集  
 久末五の黒髪山と新越て木の下おふりよるる也



蜻蛉集

北野

四國雜記

北野のふくらりと西のまきをまうけらうるを取巻を乞ふ

二荒山

朝鮮國

津溟齋

二荒山色鬱嶺屹日月低徊百八盤孤柱挿天疑虎躍  
群峰臨海若鵬搏煙霞錯綜秋如錦金碧淋漓地不寒

九尺瘦筇雙蠟屐好從瀧尾釣鯢桓

幸湖

世俗中禪寺湖水と稱せ縁起小八功德池と見へ

より山中第一の大湖にして東西三里南北一里許り

南岸小歌濱寺崎等の勝地相連り灣曲して西千手崎

小至り北の中宮祠と限り白波常小汀濱小港へて一

點の塵芥もなく清觀古へ小異をらんと云へり湖の

水の清冷をり故小魚蟲を生ぜんと云へ傳へしが

近年魚鱗を放てしより追々繁殖して水面又浮游を

ると見る又此湖の古來南湖との唱へて名の無り

しと聖上御巡幸の際上言をり所ありて幸湖と名と

賜をりしと云ふ

南岸橋

幸湖より華嚴瀧へ落り水路小架せり木橋也

長さ八九間歌濱寺崎等の通路とを又上州辺より

足尾峠へ掛り中宮祠へ詣り者小此橋を出つ

歌濱

幸湖の東南なる汀濱をり膝道上人此所ふ於て



法と修せり時天人降りて詠歌讚歎しとるふ因りて  
名附とりと今花供行者の籠る所と宿と称をり其  
旧跡なりと云へり

寺崎 歌濱より西南み方りて七八町湖中へ斗出をり

崎と云ふ此所ハ慈覺大師の草創なり嘉祥元年四月  
大師一字と創立して手刺の如来と安し其堂の中心  
小藥壺と埋めて藥師寺と号を古記ふ此藥壺ハ天竺  
の耆婆氏より或者ハ相傳しとる物と云へり此所  
ハ湖南中の勝地ふして坐して湖中と眺むるハ碧波  
山影と涵し涯樹湖曲と遠る爰ふ至て初て山水の全

躰備ハ生りと云ふべし

日輪寺旧跡 幸湖の南岸寺崎の西みあり昔勝道上人

歌濱の草庵ふ在し時大日輪の内み五大尊の出現と  
と夢む故ふ其像と刻し此地と草創して日輪寺と号  
せり又寺内み一堂と設け權現の神影及自身の影像  
と刻して堂の左右み安置を是と聞耳の像と云ふ是  
上野嶋 此嶋ハ南岸近き所みありと云ふ名所あり  
ハ湖心み浮ぶ如し嶋中み勝道上人の遺骨と納め  
し碑石あり其後み慈眼大師の骨と納めし塔あり



昔道工又此嶋小暫く住して聖朝安穩と祈り時の帝  
叡感ありて上毛の總講師に任ぜらる依て上野嶋と  
名附よりと云ふ

般若寺旧跡 湖水の西南岸小あり弘法大師の建立也

退轉の年代今考ふべからに昔寺の前小一大石あり

大師手つらら 斑と點と云ふ寛永年中の地震小

此石湖岸小倒れ梵字下小なりて見へになりぬこは

より千手崎の間小俵石梵字石杯と云ふ名石あり

千手崎 幸湖の西岸小なり延暦年中勝道上人此所小一

寺と創立して補陀洛山千手院と号を後弘法大師補

陀洛山發心壇門の題額と書して堂宇小掲けとらと

野火の為小堂宇と併せて焦土とをせり其後再建の

時御門主の額字と仰きしと云ふ此崎小純白なる石

あり土又舍利石と唱ふ又此南岸小赤岩崎とて風景

無比の岩あり其岸と隔て、冠石と云ふあり形能く

冠石似たり

千手原 此原野ハ千手崎より續き東西廣く南北狭し

此辺ハ旅人の通行せる所を知らねば知る人稀なる原

中ハ千手雁皮と云ふ草花の名品と産せ

西湖 千手崎より西小あり故小名とに凡そ一里小六



町許此水流れて幸湖に注ぐ

顯釋坊淵 中宮祠より二三町距る西の湖岸なり往古

顯釋上人の溺死せる所と云ふ此辺り小弘法大師の

開基木又寺の旧跡あり

鉢山 男鉢山の南に連なる九山なり弘仁十一年教是

座主山の半腹小轉法輪寺と創立七後真濟阿闍梨山

上小法華密嚴寺と建つ共小退轉して其旧趾と元戒

壇所と唱ふ

四條寺旧跡 中宮祠より十八九町距て西にあり弘法

大師の開基なり今此旧跡と四條寺の崎と云ふ

菖蒲沼 中宮祠より六八九町距る湖北の八江と云ふ

入江の北に一丈四方許の岩窟あり瑠璃壺と号せ此

中へ勝道上人の遺骨と納め其上へ觀音と安置せと

旧記に見へし又此北へ殺生禁断境の碑あり

地獄茶屋 中宮祠より湖水に沿て三十餘町行き往来

橋と云ふ小橋と渡せば右方の丘上なる一亭是なり

中禪寺温泉へ往返する人の休憩小設く此茶屋の東

北へ方り男鉢山の麓へ深き洞穴あり土人之と地獄

穴と稱せ其近傍に在ると以て茶屋の名に呼けりとぞ

龍頭瀧 地獄茶屋より僅小行けり路傍にあり此瀧ハ



龍頭澗 素畫





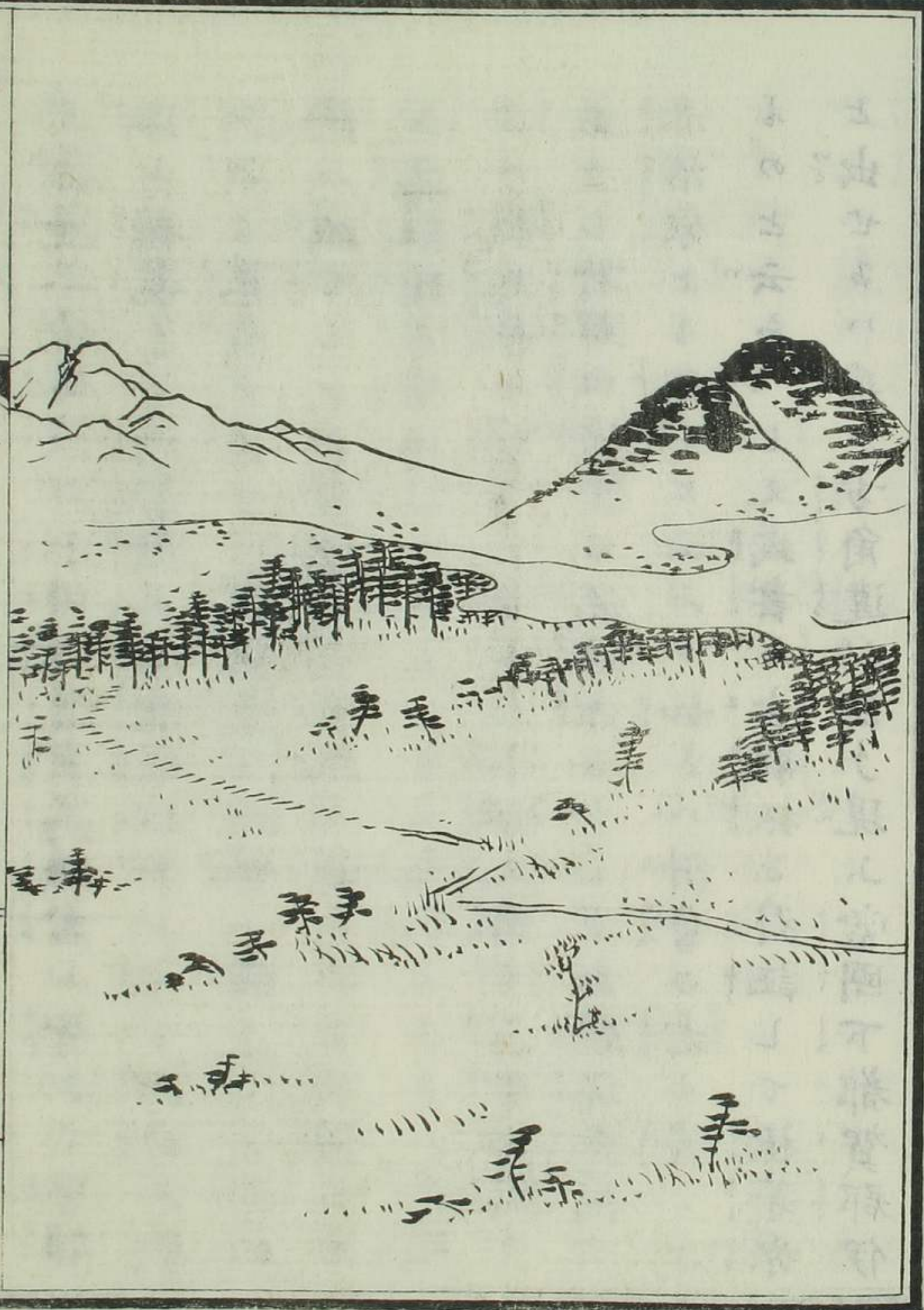
湯瀑の下流逆川の水流と合せ此小至て一の激流と  
なり其中流小岩石盤踞して小丘と為り此丘上小移  
りて瀧の全躰と望めり瀑水斜面なり岩上を奔流し  
其勢ハ數萬の白龍頭と駢べて競ひ下る如く真小  
龍頭の名小背くざるなり林檎宇之と評して晃山瀑  
布中の上流小置く成程水勢の勇壯なる岩石の奇絶  
なる壯觀ハ壯觀をせよ少しく過譽のやうも思  
はる保し此前後ハ無數の瀧ありて絶景亦筆紙の尽  
を所ハ非ざるなり

關あ加り沼ま原ら一名戰場 地獄茶屋の北小方り中禪寺温泉

一の通路なり東北ハ男躰山太郎嶽の麓小亘り西ハ  
湯瀑の下流と限り廣衰一里許平原渺茫として蒹葭  
生茂り殊小芝生の地多く右小赤沼あり左小糠塚と  
遥小望み逆川の原の北部と貫流し其山趾小二三の  
盤石ありて清水常小滴り之と古く谷の清水と云ふ  
此辺の季候ハ餘程後々六七月頃小至り漸やく春の  
時氣と得て草花一時小開き原中更小爛漫と遊客  
思を以て徜徉して長途の勞と忘る相傳ふ此原中小靈  
沼あり開祖上又關伽の水と汲まし也名と以て關伽  
沼原と唱へしと後世赤沼と書誤りしと方今赤沼と

龍山集 卷之二 全





戰場原



又嘉慶年中常陸の小田入道直高鎌倉小背きて男躰  
山小楯籠まゝ時管領上杉朝宗打手小向て山中小戦  
ひと小勝負と決せ以後鎌倉の詐謀小係りて小田氏  
終小滅亡しと事鎌倉大草紙小載せと今猶山中  
小幕張楯弓張楯杯と称せり小の存在とせまば其項  
より戰場原と唱へしならん土俗又傳て上世神戦の  
ありし時鮮血流きて池沼赤ありし由名戰場原或ハ  
赤沼原と小称せと云ふが如まハ附會の尤も甚しま  
小のと云ふべし又或書小古歌杯と引証して標茅原  
と出せりハ飛と方角違ひなり現小當國下都賀郡伊

吹山の麓河原田村小標茅原とてさし艾の名品と産  
そと所あり小非や契冲の勝地吐懐編よ小標茅原  
ハ伊吹山の裾野と記しと此原中ハ小僅小蓬ハ生  
ぞと小身と焼物とハ為がよ小若茅と摘て食用と  
為小過ハ故小是等ハ古歌と引用して却て世の朝と  
招く小のと云へり  
湯瀧 湯湖より落来り急斜なり岩面と飛下せりこと  
四十五六丈幅十五六間其水勢岩石と穿て響き雷の  
如く白泡四方小飛散して崖樹動揺せり此瀧往時ハ  
路頭より僅小一部分と見ふのこみて又の知らざり





湯瀧

木末堂





しう越後三條の人初て之と探り新道を開きてより  
瀧の全態と見るふ至る且復軒大槻氏為ふ文と撰  
碑と瀑下小建て、以て壯觀と世小知らしむ其評小  
曰其麗似霧降其大有華嚴雄若龍頭觀背瞠乎其下矣  
と古研齋杉氏亦題字と書して瑰偉雄麗と二氏の言  
既小斯の如し編者復何を贅とるを要せし

湯湖 湯瀑の水源ふして南北大餘町東西十二三町半  
嶋中央ふ斗出し湖水灣となして風景絶佳也此湖往  
時ハ魚類と見ざりしう先年鯉魚と放し、より追々  
繁殖して金鱗湖面小浮遊温泉の湯守なる者之と

漁し以て遊客小饗也山上鮮魚と食せり亦開明の

餘澤と云ん

中禪寺温泉 世俗湯元と称也中宮祠の西北小方り行

程三里と唱ふまよ二里強小過江地形ハ東西北の

三面小山と遠らし南の一方ハ湖水と共に開けしう

浴槽ハ東の山麓小散在して十餘湯あるまよ分析と

經とるハ左の六湯とを

河原湯 等ハよるし

中湯 等ハよるし

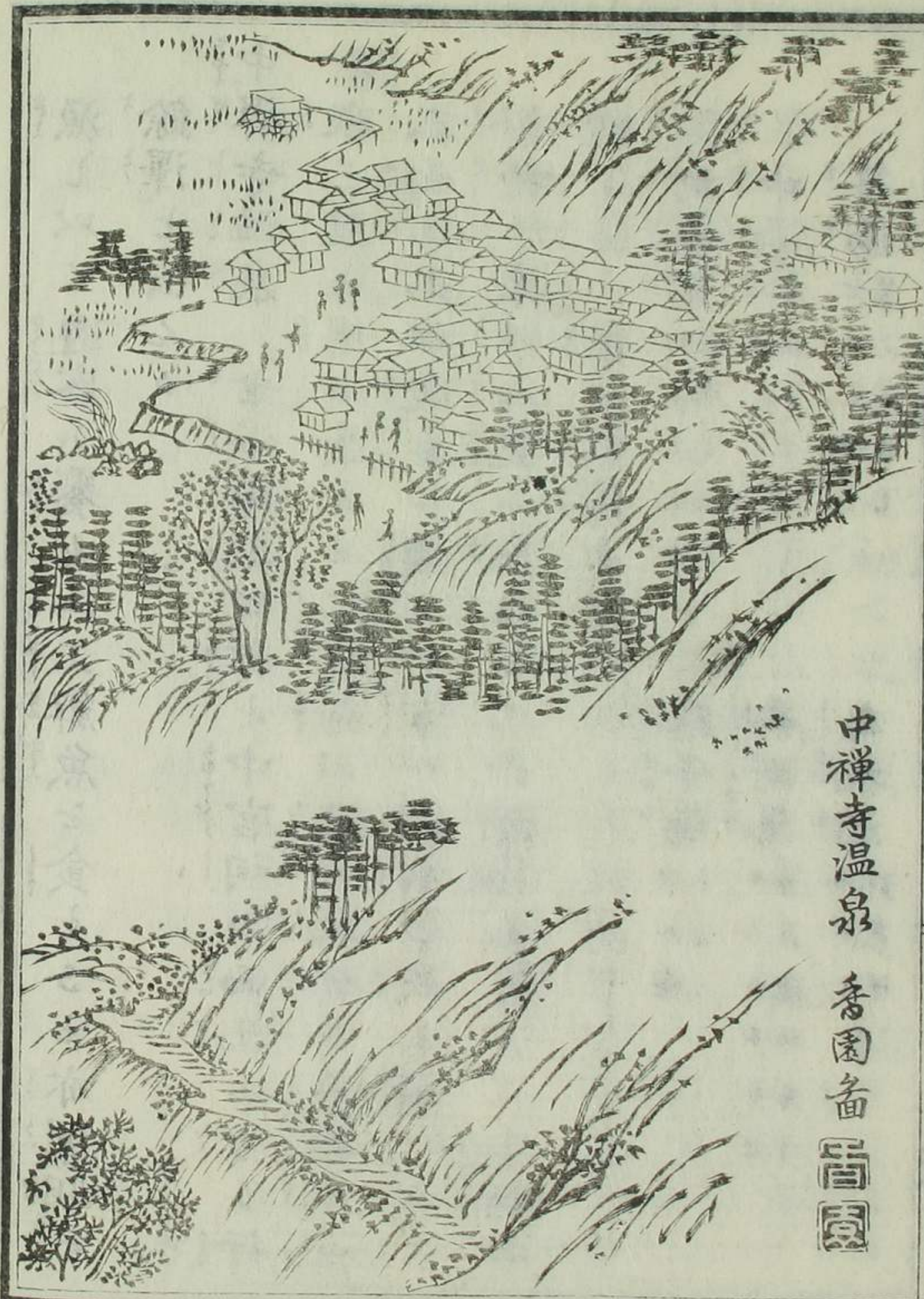
笹湯 等ハよるし

純子湯 目ハ疾

御所湯 等ハ速功あり

自在湯 引ハせ





中禪寺温泉 香園畜畜園



右浴室の内小分析表と掲げ八口小男湯女湯の標札と掛て區別正しく且清潔也湯守ハ日光市中の居民にして十一軒あり冬春の際ハ雪深く寒威烈しき小より陰曆四月八日初て浴室と開き九月八日と期とし室と閉て下山せりと例とを近年浴場の盛なる小從ひ營繕建築日よ加えり二層或ハ三層の高樓と構へ各々大屋支店と分ちて客室と設く就中松本某の樓上ハ湖面小對して風景尤も宜し此温泉開關の年代今得て知るべあらざるも旧記ハ天文十三年鎌倉公方入浴云云とあるハ其以前より開けしむるものと

見也又正保年度前迄ハ御所湯姥湯三間湯の三槽のくをりしと追々家屋と移して浴室と開きしと云ふ然をとも當時女人牛馬結界の場所を造り浴客も多うらざりし小明治維新以來其禁を解きてより運輸の便と共に開けて今日の隆盛と見らふ至りしとぞ狩籠湖 太郎嶽と湯元裏山の間なる山中ハあり山上より之と望めハ廣き七町許とも見也相傳ふ上世此山中ハ人と害を毒蛇の住けりと靈神ありて此所小狩籠しと名附しと上之類とて説も多けまハ信を置ふ是らに



編者曰晃嶺中山腹山趾小四十八湖ありと聞つる  
と今其所在も定らざらん僅う小名と有る物  
野端湖蓼湖其他二三の小湖あるを望と風景の  
見らば所なく且山間嶮隘の地も散在しては  
之と探らば徒ら小瘦脚と勞をり小過に故又一々  
記せりと要せざるなり若湖沼と尽さんと欲する  
人の其地の耆老も尋て道と覓むべし



晃山勝概卷之二終



